
道化の造った英雄譚

えそら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道化の造った英雄譚

【Nコード】

N8285W

【作者名】

えそら

【あらすじ】

朝霧 潤也はいつも通りの朝を迎えようとして、体が縮んでいた。もとい異世界に飛ばされサイカという人物に憑依していた。突然の異世界生活に戸惑いながらも割と高性能な体に浮かれたりして日々を過ごす異世界ファンタジー。

これは魔物も魔術も存在する世界で、朝霧 潤也がサイカとして生きていく物語である。

プロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。

実在の人物及び団体とは一切関係ありません。

うん、やって見たかっただけです。特に気にせず本編にお進みください。

それではこの物語を宜しく願います。

ブローグ

人里離れた石造りの家、その一室で白いローブを着た女性は困ったように笑っていた。

アルビノの白髪を弄りながら、その赤い瞳は眼下に寝かされている少年に向けられている。

「固有能力の模倣、失敗。

魔術適正の模倣、不具合発生。

身体能力の模倣、上書きに一部成功。

経験則の模倣、限定的に成功。

知識の模倣、失敗。

総合再現率、約二割。

備考、異物混入の疑いあり。

結論——失敗作だね」

笑みを絶やさぬまま、実験体である少年へと冷ややかな視線を送る。

彼女はとある人間と同じ存在を作り出すための研究をしていた。

いわゆるクローン技術。それも知識や経験すら同様なクローンだ。

しかし研究は順調ではなかった。

経験知識を持ち合わせたクローン体を作成することは可能だったが、あの人間の模倣はどうしても不具合が出るのだ。おそらくはクローンの対象である人間が生物としてあまりに逸脱しているためだと思われる。

そうして幾度も失敗を繰り返している内に、ふと妙な考えが浮かんだ。

一から作るうとして駄目ならば生きている人間を、あの人間の模倣になるよう作り変えてみてはどうか、と。

元の人間と言う不純物が入るのだから成功する可能性は皆無と解ってはいたが、貴重なデータが取れる可能性はある。加え気分転換も兼ね、その辺りの子供を掻っ攫い実験を施してみた。

結果のみ見れば手酷い失敗だった。一から作った方が断然 完成度が高い。だが実験中に死ぬとだけ、生存した状態である程度の模倣に成功したのは驚きだ。中々に面白い実験結果が得られた。

失敗作ではあるが貴重なサンプルでもある。

「うーん、少し悩むけど……まあいいか。この程度の出来だしね」

につこりと微笑み、少年の廃棄を決めた。殺す訳ではなく、ただ手放すだけだが。

「さて、そろそろ旅を再開しようか。興が乗り過ぎてつい長居してしまったからね」

女性が部屋から出ていく。

後には実験体である少年だけが残っていた。

朝霧 潤也は日本人である。

高校三年生で、大学には行かず就職活動に勤しむ毎日を送ってい

た。

そして今日も朝が来る。これから始まるいつもの生活、頑張つて起きますかと眠気を無理やり醒ませて起き上がる。

起きたら石造りの部屋だった。

どうやら上手く頭が働いていないようだ。目を擦つて眠気に喝を入れる。

改めて見渡した。特に変化なし。

(どこだよ、ここ)

潤也は昨夜、きちんと学生寮で寝ていた。

仮に記憶違いをしていたとして、友達の家などならともかく知らない場所と言うのは明らかにおかしい。

ならば残る可能性は、誘拐。

思わず何故？ と考えてしまう。

言いたくはないが潤也は貧乏である。資産家の親もない。誘拐しても問題になり難いかもしれないが、旨味もない筈だ。それに誘拐ならば縛られてもいないのは不用心ではないか。

必死に否定要素を並べ立てる。これだけ否定要素があれば大丈夫な筈、と冷や汗が流しながらも自分に言い聞かせた。

ともかく情報を得ようと周りを見渡し、ふと壁際に大きな鏡が目につく。

そこには一人の少年が映っている。金髪碧眼の西洋人らしき12、3歳の子供で、なのどこか潤也の子供時代に似てなくもないような少年であった。

しばらく沈黙した潤也は、おもむろに手を動かした。鏡の少年も同様に手を動かした。

（んな阿呆な）

どうやらこの少年は自分らしい。

見渡す限りに広がる青空。八方を取り囲むように生い茂る木々。太陽の光を反射しながら流れる川。

石造りの家を出ると、そこは大自然のど真ん中だった。

自然豊かなのは結構なことだが、今の状況は勘弁して欲しい。潤也が今いる場所は山の麓らしく、遠くに街が見えるのがせめてもの救いだった。その街も中世ヨーロッパかと言つような有様だが、人里が見えたことで潤也は幾分落ち着きを取り戻す。とりあえずあの街を目指すことにした。

二十分ほど歩き続ければ、少年の体が割と体力があることに気付く。

足場の悪い道を進んでいるというのにほとんど疲れないのだ。ともすれば元の体より調子が良いかもしれない。

子供の体だから体力がない可能性を心配していただけに嬉しい誤算だ。同時に元の体とてバイトでそれなりに鍛えられていたと思つていただけに、少し情けなくもあつたが。

不意に足を止める。

これが環境の違いから来るカルチャーショックって奴か、と軽く現実逃避する。

見慣れない生物と遭遇したが故に。

人型の茶色い巨体は二メートル半もの大きさを誇り、その手には錆びついた斧を持っている。下半身を薄汚い布で巻き付けた状態の半裸の巨人。

その顔は牙を生やした獣つい豚だった。

潤也の知識にある数々の物語の中に、この生物に該当する存在が居る。

名を、オーク。

地球上には存在しない架空の生物である。

「プギイイイイイ！！」

オークは斧を振り上げながら突進してきた。

ビク、と体を震わせる。日本人である潤也にとって生存競争は縁遠い世界での出来事だった。それ故に体は恐怖で竦み、頭は真っ白になる。

力強く振り下ろされる斧。走馬灯のように、スローモーションに斧の刃が近づいて行く。

（――あ、これ死んだ）

あまりに間抜けな感慨を抱き、全身の力が抜ける。だからそれ以降の行動は、潤也の意思とは無関係に行われる。

斧を振り下ろさんとするオークの腕を掴む。斧を振り下ろす力を巻き込みながらオークとの体を入れ替え、軽く足を払う。それだけで大した力などなくオークの巨体が宙を舞った。そして顔面から地面へ落ちる。

骨が碎ける嫌な音が鳴り響き、大きな音をたてて巨体が倒れた。

潤也は倒れたオークを呆然と見つめる。
身動き一つしない。紛れもなく絶命している。

（んな阿呆な）

天を仰ぎながら思った。

潤也に武道経験はない。どころか喧嘩すらほとんど経験がない。
にも関わらず自分の倍ほどもある巨体を投げ飛ばした。大した力
も使わず技量のみで。

そこから導き出される結論、この体 物凄い。

（いや待って、その前になんでこんなオークみたいな生物が出て来
てんの！？ まさか此処は異世界でファンタジーだとも言うのか
！？）

否定できる材料はどこにもなかった。

代わりに肯定する材料なら割とあった。

とにかく此処に留まっても仕方がない。動くことにしよう。
だがその前に、オークの死体から斧を拾い上げた。その際に顔の
潰れたオークを直視して少し気分が悪くなる。

それでもこんな生物が出て来た以上、まだ危険な生物が周りに居
る可能性が高いのだ。武器がないのは心もとなかった。
斧は大きくて重いが両手ならそれなり程度の重量だ。
オークの死骸から意識を外して歩き始める。

変わり映えの無い森の中を早足で進む。

少しでもオークのような生物と会わず、街まで行こうと出した苦
肉の策だ。

そしてオーク遭遇からしばらく、横にある草が不自然に揺れた。

気になりその草を見た瞬間、草の中から野犬が飛び出して来た。口を大きく開けながら駆けて来る野犬。その速度は予想以上に速く日本人の朝霧 潤也では抵抗すら出来ず噛みつかれていただろう。しかし今の体は確実に防衛本能を働かせる。

体を捻りながら野犬の突進を躲し、すれ違い様に野犬の胴へと斧を一薙ぎした。驚くほどに味気ない手応えと共に、野犬の体が二つに分かれる。

「……ええと、本当に凄いなこの体」

潤也にしてみれば、野犬に襲われたと思ったなら既に終わっていたと言っ状況だ。自分が対処できたことが半ば信じられず現実感が湧いて来ない。

ただ後になるにつれて恐怖感が湧き、対処できて良かったと深く安堵する。

それから周囲を警戒しながら森を歩き進めて行っった。

幸いしばらく危険そうな動物と遭遇することはなかったが、それでも幾度かは野犬に襲われることになる。勝手に体が対処してくれたため大事に至らなかったことが救いだろうか。

斧の重量を甘く見ていたことを痛感させられる。

少しの距離ならまだしも何時間も歩くとなるとさすがに疲労が溜まっった。

それでも頑張った甲斐はあり、森を抜けることが出来る。

そこからの舗装された道は楽だった。特に襲われることなく安定して歩を進め、やがて街に到着する。

それなりに人の多い街だ。

当初は斧を持ったままで大丈夫か不安に駆られたが、街中には武装した人も居たので少し安心した。もっとも仕舞っている訳でもなく手に持ったままなので、あからさまに見られてはいるのだが。

大通りを歩いている所為か大きな建物がよく目に付く。中世ヨーロッパ風の建物なためか三階建て程度でも充分に大きく見えるのだ。そして宿屋を見つけた。そこで立ち往生する。

端的に言つて、金がなかった。

通りがけに武器屋らしき店を見つけたため、斧を売り払う手はある。だがそれも所詮は一時凌ぎにしかない。しかも使い古されたこの斧が宿屋一泊分の金になるのか疑問だ。

とはいえ最悪 食事代くらいはなりそうだし、と考えていると一人の少女が潤也に向けて歩いてきた。

明るい茶髪は肩口まで伸ばされおり、瞳も綺麗な琥珀色をしている。柔和な表情なら可愛らしいだろう顔を不機嫌そうに歪めながら、少女は潤也の目の前まで来た。

そしていきなり殴りかかってきた。反射的に躲す。

「いきなり何!？」

「うるさい、避けるな」

低い音程で横暴を吐きながら潤也を睨む。
がっしりとその腕を掴まれ、凄い力で引っ張られた。

「とにかく行くよ」

抵抗しようとしても引き摺られるほど力強い。

体が反応し斧を振るいかけ、相手は女の子だと自制した。

困惑しながらも何故こんな状況になっているのか、そして何処に連れてかれるのか疑問が湧く。

「あのさ、何処に連れてく気なんだよ」

少女が僅かに振り返った。

「あんたの家」

その言葉で、体感温度が一気に下がる。

それはこの体の家のことだろうか。ならこの少女もこの体の知り合いか。だとするなら先ほどの馴れ馴れしさに納得が行った。

あまり考えないようにしていた。潤也はこの体本来の持ち主を、意識はせずとも殺して此処に居るのではないかと。

「……顔色悪いけど、大丈夫？」

「怪我とかは、ないよ」

「そう？」

そのまま少女に腕を引かれて歩いた。

本音を言えば潤也は逃げたかった。罪悪感からこの体の知り合いと顔を会わせるのに恐怖が湧いていた。

それでも潤也がこの体である以上、逃げられないことだとも思う。

やがて一軒の建物に辿り着く。

少女は潤也の腕を離し、ドアをノックした。

しばらくしてドアが開く。女性が出て来る。軽くウェーブの掛かった金髪に、柔和そうな雰囲気のある女性だったが、それを打ち消すように眼の下には隈が出来ていた。

「お待ちせしました。どちら様で……す、か？」

潤也を捕え、女性の蒼い瞳が大きく見開かれる。

「サイ、力？」

この体の名前だろう言葉を呼びながら、震える両の手が伸びて来る。

優しく抱き締められた。

「無事で良かった……おかえりなさい！」

その女性は涙を流しながら喜んでいた。この体の、サイカと言う人物が帰ってきたことを。

「……………うん」

潤也は曖昧に頷く事しかできなかった。

女性の家まで潤也を連れて来た少女と別れ、女性に連れられるがまま彼女の家に入った。その際に斧のことは後で詳しく聞かせて貰うと言われ、斧を取り上げられる。

通された部屋は、現代風に言えばリビングだろうか。木製のテーブルが中心にある簡素な部屋だった。

そして室内には眩い金髪の、今の潤也の体より更に小さい少女が居た。必然的に眼が合う。

潤也を――正確にはその体であるサイカを見て、いきなり少女は飛びついて来た。あるうことか「お兄ちゃん！」と叫びながら不意打ち気味だったため、慌てて受け止める。

「お兄ちゃんのバカあ！遊んでたらいきなり消えちゃうし。待ってても戻ってこない、探しても見つからないし！どこ行つたの！？どうして今まで帰つて来なかったの！？」

潤也に泣きながら罵詈雑言を浴びせるサイカの妹。その内容を聞く限り、サイカという人物は行方不明にでもなっていたらしい。ぽかぽかと弱い力で殴ってくるのはまるで痛くないが、どうすれば良いのかわからず途方に暮れた。とりあえずされるがままになりながら、ごめんと謝りつつ背中をさすったりする。

サイカの中身が違うと言う罪悪感に胃が痛い。

何よりサイカの肉親、しかも年端も行かない少女を騙していることに穴があつたら入りたい気分だった。

仮初の妹をあやし始めてしばらく。不意に彼女は体を離れた。――

通り言いたいこと言ってすっきりしたのか涙もある程度は引いたようだ。

そして二人の傍らで見守っていた女性にサイカ妹が歩み寄っていく。

「お母さん！ もう消えたりしないようお兄ちゃんに説教してやって！」

その言葉で必然的にサイカの母親と確定したその女性は、苦笑いしながら妹を撫でる。

「落ち着きなさいユリス。まずどうしてこんなことになったのか聞いてからでしょ」

ユリスを諭しながら問いかけてくるサイカの母親。その視線に掌から冷たい汗が流れた。

「何があつたかは、自分でもわからないんだけどさ」

潤也自身、この身に起こった出来事について把握していることは少ない。

そしてサイカの中身が違うという事実は、どう説明しても昏倒無形。異世界とはいえ、潤也の他に憑依などと言う特異例があるとは限らないのだ。

それならいつそより現実的で起こり得る説明をした方が良いでしょう、と考える。

「記憶が無いんだ。それもここ数日とかじゃなくて、俺がこの町でどう暮らして来たのかも覚えてない。自分の名前も知らなかった。だから俺にわかることは、朝起きたら山の麓にある家に居たこと

くらいかな」

母親の顔が強張る。

ユリスも不安そうに潤也を見る。

潤也は早速二人の視線から逃げたい気分には駆られた。

「サイカ、どこまで忘れてるの？　もしかしてお母さんの名前もわからない？」

「……ごめん、わからない」

嘘は言っていないが、母親の悲しそうに顔を歪める姿を見て視線を逸らしそうになった。

「お兄ちゃん、私のことも忘れちゃったの……？」

「……思い出せない」

ユリスは今にも泣き出しそうになっている。

潤也も雰囲気に取り摺られて少し目頭が熱くなってくる。

二人の表情を潤也はもう忘れられそうにない。それ程　記憶に刻みつけられた。自分でやったことながら、度し難いにも程がある。

「あの、本当にごめん……」

思わず口をついて出た。

その言葉で母親はすぐ対面を取り繕い、潤也の頭を撫でた。

「うっん、気にしないで。記憶ならいつか思い出すかもしれないで

しょ。それよりサイカが戻ってきてくれたことが嬉しいもの」

記憶喪失は説明し易い。潤也にその理由があつたのは確かだ。だがサイカの中身が違っているという説明を避けたその理由の根幹は違う。ただの保身だった。

例えばこの親子やサイカと親しい人から憎まれるのではないか。或いは珍しい実験動物にされるのではないか。そうでなくても突然の異世界で、何の道標も無い状態で不安だった。そんな危惧が、潜在的に潤也を保身に走らせた。

それを自覚した潤也は、すぐに吐き気を催す。サイカの母親に頭を撫でられていることで気分が少し和らぎ、同時に罪悪感が増えていく。

「お母さんはアーシェって言うの。そしてこっちがサイカの妹のユリス。」

もう忘れないでね」

「今度忘れたら……えと、叩くからね！」

ユリスが泣きそうになりながらもそう言い放った。

「うん、もう忘れないよ。大丈夫」

そんなユリスに作り笑いまでして白々しいことこの上ない言葉を吐いた。

体が重くなる気分だ。だが吐いた言葉はもう飲めない。

この日を境に彼は、朝霧 潤也であることを止め、サイカとして生きていくことに決めた。

あれからしばらく話し合い、サイカの罪悪感も少し落ち着いた頃。アーシエは前々から疑問だったことを問いかけることにした。

「ところでサイカ、貴方の持ってきた斧はどこで手に入れたの？」

「森を歩いてる時に斧を持った豚顔の巨人と出会ってさ。そいつ倒して奪ったんだよ」

あっけらかんとした息子の言葉に、アーシエはまず耳を疑った。

「凄いね、お兄ちゃん。それってオークでしょ？ よく倒せたね」

「俺も記憶なかったからびっくりしたよ。まさか倒せるとは思わなかったから」

そして屈託なく尊敬の眼差しを送るユリス。それにサイカは、本当にオークって言うんだなあと思いながら答えを返す。

その兄妹の会話を聞いて、アーシエは自分の頭が狂ったんじゃないかと疑った。或いはサイカが嘘を付いているのでは、と考えた。

ただ改めて思い返せば、山の麓にある家から帰ってきたとサイカは言っていないかったか。

この近くにある山と言えばフィリアス山だ。その山の麓からこの街まで行くとなると、どうしても魔物が多く生息する森を進まなければならぬ。仮にオークと会っていてもおかしくはないだろう。

「あの、サイカ？　ちなみにどうやって倒したの？」

「腕を掴んで足を払って投げた、のかな？　自分でもあんな芸当が出来るなんてびっくりだったよ。もしかして記憶失う前は武術かなんかやってた？」

アーシエは自分の頬が盛大に引きつることを自覚した。

「投げて倒したの？　魔術使って、とかじゃなくて？」

そんなアーシエの反応に訝しみ。次いで魔術という単語にサイカの興味の対象を持つて行かれる。

オークがいた所からもしかしてとは思っていたが、本当にここはファンタジーな所のようなのだ。

「投げて倒したよ。魔術のことまで忘れてたから」

「そう、魔術まで忘れてしまっているのね。……でも武術なんてやらせたことないわよ？」

予想外の言葉にサイカは狼狽える。潤也が武道をやっていないため、必然的にサイカが体得していた技術だと思っていたのだが。

「狩りとかやって身につけてたりは……？」

「狩りなんて危ない真似させたことないけど」

憑依した拍子に力を手に入れたのだろうか。だがその力が技量となると、どんな要素で手に入れたというのか。

サイカは行方不明だったらしい。その間に潤也が憑依し、武術を身に付けるだけの何かが起こったのだろうが、何が起こったのかは検討もつかない。

その事実サイカを少し不安にさせた。

「……考えても解らないことならもうやめておきましょうか。深く考え過ぎると埒埒に嵌るもの」

「かも、しれないね」

「じゃあ気分転換に魔術を覚え直そうよ、お兄ちゃん。確か忘れてるんだよね？」

「そうだな。基礎からわからないんだけど、教えてくれるか？」

ユリスが明るく頷く。

気分が憂鬱に入っていた時に興味のある魔術を教えてくれるというのだ。正直ユリスの提案はサイカにとって渡りに船だった。

「魔術を使うには魔力が必要なんだけど、お兄ちゃんは感じ取れる？」

「感じ取れないかな」

「そこからとなると………確か、眼を瞑って体内に意識を向ければ、その内 感じ取れるようになる、よね？」

「ええ、魔力を感じ取れない人は瞑想を何度もするの。それで一週間もすれば大抵は感じ取れるようになるわね。」

サイカの場合は魔術の使い方を忘れていただけだから、すぐ出来

るようになるんじゃないかしら」

「そっかな、やってみる」

言われた通りに目を瞑り、体内に意識を向ける。すると丹田と呼ばれる腹の下辺りに違和感、と言うより潤也の体にはなかった異物感がある。

これが魔力だとすんなり理解できた。

丹田を中心に、徐々に全身へと行き渡らせていく。体が暖かくなり、軽くなったような気がした。

「魔力流動の基礎まで出来るようになったみたいね。それで体を強化したりも出来るけど、魔力を使い過ぎると気絶するから注意が必要よ」

「わかった、気を付ける。にしても魔力だけでも結構 便利そうだね」

「ええ、そうね。……そういえば魔力強化もなしにオークを倒したことになるのよね」

その非常識さにアーシェは眩暈がした。

魔力強化もなしに素手でオークを打倒する。そんな芸当は王宮の近衛騎士ですら出来ないだろう。

ただ改めて考え、サイカの言葉をもはや嘘と断じることが出来なくなっていた。

最近ある噂をよく聞くのだ。

曰く、道化がやって来た。

そこから予想される最悪の事態ならば、可能性はある。

彼女の実験にサイカが巻き込まれたならば、異様な力を付けているのは在り得る話だ。無論可能性は低いが、状況的に考えて無いとは言いきれなかった。

「それじゃお兄ちゃん、魔力が感じ取れるならアカシックレコードの末端に伸びる回線も感じ取れたよね。接続してみて」

「接続……？ いや、よく意味がわからなかったんだけど」

「魔力を全身に行き渡らせることで体内を把握することは出来たんだよね」

「なんとなく把握できてるね」

「なら体内に、こう異次元に伸びてるような回線がある筈だよ」

ユリスに言われ、瞑想して体内の把握に努める。

異次元に伸びているのなら異質な感じなのだろう。だがやはりサイカにはそう言った物は感じ取れない。どう体内を調べても、体内のみで完結している。

眉根を寄せて調べ続けるサイカに、ユリスも徐々に不安になって来た。

「お母さん、こういう場合ってどうすれば良いんだっけ」

「それは……どうすることも出来ないわね」

その言葉で瞑想をやめたサイカは、苦虫を噛み潰したような表情をするアーシェを見て驚く。

実際サイカが躓いている段階は、魔術を習得する上で本来は在り得ない。魔力流動による体内把握と連動し、必然的に回線が見つかる筈なのだ。それが感じ取れなかったとするなら理由は一つしかない。

「魔術失陥なのでしようね……原因は解らないけど、サイカは魔術を使えなくなった、と考えるべきなのかしら。

あ、でも大丈夫よ。200年前ならいざ知らず、今は魔術が使えなくても特に問題にならないもの。この国の初代国王陛下なんて魔術どころか魔力も扱えなかったのよ。それでも皆から認められていたって言うし、気にすることはないわ」

安心させるように言葉を募っていくアーシェを見て、逆に不安が煽られた。

この時、この世界に対する知識が多少でもあれば、アーシェの言葉は安堵する内容だったかもしれない。だが日本人であり魔術などまったく知らなかった潤也にとって、あの内容は精神を落ち着ける意味では逆効果だった。

魔術失陥というのはアーシェの言葉から推察するに、昔は差別の対象だったようだ。そしておそらくは、今でもそれはある程度続いているのだろう。

サイカとしての生活に、少し不安が残った。

街の人々は寝静まり、森の夜行性生物たちは犇めき始めるような真夜中。フィリアス山の麓には石造りの家があった。

外装内装共に上手く整えられている。少なくとも一見では悪くない造りと思えてしまう、だが眼を凝らしてよく見ると所々で荒さが目に付いた。

しかしこの家が即興で、それこそ物の数分程度で造られた家だと知れば、気付いた者はそのあまりの異質さに言葉さえ失うだろう。

だが今家の中に居た人物、アーシエにはそんな事実など気付いても関係がなかった。

この家全体に残留する魔力を感じ、ギュツと拳を怒りで震わせる。この魔力をアーシエはよく憶えていた。

二年前、とある辺境の村が人知れず壊滅するという事件があった。そして村人の居なくなつた村には歪な魔物達が蔓延り、国はその魔物達をすぐに殲滅する。

その後、村壊滅の原因調査が始まった。調査団の中には、高名な魔術師でもあるアーシエもその調査に参加していた。

そして調査の結果、魔物達の正体は村人達の成れの果てだったことが判明する。

A（傾国）級 犯罪者、道化師マルグリット。彼女の実験のために、村は壊滅していた。

この石造りの家からは、あの道化師の魔力が濃く残留している。これでサイカがマルグリットの実験体とされていた可能性は、かなり高まった。ほぼ確定したと言っても良いかもしれない程に。

一步間違えればサイカは死んでいただろう。もしマルグリットの実験が最悪な結果だったなら、そう考え恐怖に身が震える。彼女の実験に掛かりながら、本当によく五体満足で生きて帰ってくれた。

ただ叶うならば、物理的に無理だろうことは解っているが、
道化師マルグリットを地獄の底まで引き擦り降ろしたかった。
そうアーシェが想ってしまったことは、一人の親として仕方がな
いことだった。

ブローグ（後書き）

ブローグとブローグ2を合併しました。

1話 孤児院にて

塀に囲まれた土地の、鉄格子の扉の向こうには白く長い面積を誇る建物が見えた。街の中心部から外れた位置に座すこの土地は個人経営の孤児院である。そしてアーシェの生まれ育った家でもあるそうだ。

サイカとユリスはその孤児院へ遊びに行くことになっていた。元より暇な時は兄弟でよく孤児院に遊びに行っていたそうだ。

ちなみにアーシェはここ最近で溜め込んでいた仕事に明け暮れている。と言うのもサイカが行方不明になっていた5日間、ほとんど仕事が手に付かなかつたらしい。そして貯まりに貯まった仕事を消化するため今は修羅場なのだそうだ。

孤児院の中に入ると、黒い執事服を着た爺が出迎えてくれる。灰色の髪と瞳が目につく老人で、兄妹の来訪に笑顔になることで顔の皺を更に際立たせた。

孤児院を個人で経営しているだけはある、執事を雇う余裕があるらしい。この館の主は一体どれほどの資産家だろうと考えを巡らせる。

「ようこそ二人とも、歓迎します。特にサイカはよく戻ってきましたね。記憶を失くしている件に関してはアーシェから聞きました。ですが安心してください、皆良い子達ですからすぐ溶け込めますよ。……おっと、自己紹介がまだでしたね。私はジョシユア、この孤児院の主です。よろしくお願い致します」

「こちらこそよろしくお願いします、ジョシユアさん。……ところで違ってたら申し訳ないんですけどその服って執事服

「ですよ？」

「造形は似ていますが違いますよ。もともと執事服を意識していないと言えば嘘になりますが。以前に執事をしていたことがありましたから、その名残で執事服と似た服を着ていることは間々あります」

「そうだったんですか。すみません、変なこと聞いちゃって」

「いえいえ、服だけならまだしも、以前の名残で時折立ち振る舞いも執事のように成ってしまえますからね。勘違いされても仕方がありません。自業自得という奴です」

ジョシユアが穏やかに微笑む反面、サイカの背筋は冷や汗で濡れていた。

解り易い質問だったのは自覚している。だがそれでも失礼なことを考え、その心内を見透かされては苦笑いしか出ないのも事実だった。

「お兄ちゃん、そろそろ行こうよ」

「ん、そうだね。それじゃジョシユアさん、失礼します」

「じゃあね、ジョシユアお爺ちゃん！」

「ええ、ゆつくりして行ってください」

ジョシユアさんに見送られ、ユリスに促されて廊下を進む。ちよつとした体育館ほどの広い部屋に着いた。特に何がある訳でもないが、これだけの広さなら運動だって出来るだろう。室内には

十数人の子供が思い思いに遊んでいるようだった。

入口付近にいた同世代であろう二人の少年が、サイカ達に気付き近寄ってくる。

片方は赤髪で野性的な少年だ。中でも特徴的なのは金色の瞳で、爬虫類の眼のように瞳孔が細長かった。

もう片方は肩より長い金髪の、碧眼の美少年だ。特に長く尖った耳はよく目に付いた。

さすが異世界と言えば良いのだろうか。

どうやら人類にも色々とあるらしい。ともすれば数種類に分けられていたりするのだろうか。

「よおサイカ、記憶喪失になったってのは本当か？」

赤髪の少年が話しかけてくる。

その隣では金髪の少年とユリスが「久しぶりだね」「久しぶりー」など挨拶している。

「実際に記憶がないからね。だから自己紹介とかあると嬉しいな」

「俺はイグルってんだ。別に憶える努力はしなくて良いぜ？　すぐ忘れられない名前になる」

そんな意味不明なことを言って意地悪く笑う赤髪の少年イグル。そんな彼の頬を吊り上げる様は酷く似合うのだが、将来　悪人面になりそうだなと妙な感慨を浮かべた。

「僕はリオン。よろしく」

金髪の少年は柔和な笑みを浮かべて自己紹介してくれた。

「うん、二人ともよろしく」

自己紹介はつつがなく終わった。

記憶喪失という嘘がすんなり吐けるようになったことに憂鬱になる。表面に出すような真似はしないが、これから自分どこまで嘘で塗り固めてしまうのか少し怖くもあった。

「さあて、さっそく勝負と行こうぜ！」

「はあ、勝負……？ 勝負ってどんな？」

「魔術勝負！ どっちがより高度な魔術を使えるか競おうって訳だ。どうよ、まさかあの優秀だったサイカが逃げるなんて言わねえよなあ？」

「いや俺って魔術失陥とかで魔術使えないんだけど」

その瞬間、場の空気が凍った。
言った本人が狼狽えるほどに。

「あー、えとな、その……すまねえ」

「や、出来ればむしろ気にしないで欲しい」

「そう、か？ そんなこと言ったら本当に気にしないぞ？」

「俺はその方が嬉しいよ」

魔術失陥と言うのはやはり厄介なようだ。蔑むような視線は感じないが、同情するような視線は幾らか向けられるようだった。

「それなら魔術の必要があつた時には遠慮なく言つて欲しいね。僕もエルフの端くれだ。さすがにユリスには劣るけど、魔術にはけっこう自信があるんだ」

「もちろんあたしにはいつでも頼つてねーお兄ちゃん」

「ありがと、必要な時は声をかけるな。それにしてもリオンがエルフなら、もしかしてイグルもなんか特別な人類？」

「種族も忘れちまつてるんだな……まあ俺は特別っちゃ特別だぜ？なんせ竜人族だからな。人類では最も希少な種だ」

「なんか凄そうな種だな……」

ユリスがエルフだと言うのは数ある物語の知識からなんとなく推測はしていた。だがまさかイグルが竜人族、名前からして竜の因子がある人と言う事だろうか。道理で眼が爬虫類な訳だと納得する。

「ところでイグルはさっき俺に魔術勝負を仕掛けて来たよね。それつてとつておきの魔術を仕入れて来たつてことだろ？ よければその魔術を見せてくれないか」

「えっ、そんなの見たいのか」

「とつておきなんだろ？ 見ない訳にはいかないさ」

「そ、そうか、見ない訳にはいかないか」

イグルから冷や汗がたらたらと流れ始める。
そもそもイグルがサイカに魔術勝負を挑んだのはかなり不純な理由だったりする。

実はイグルは魔術がこの上なく苦手なのだ。孤児院内でも屈指のしよぼさを誇っている。それに引き替え記憶を失う前のサイカは、この年齢にしては優秀な魔術師だった。

サイカが記憶喪失になったと聞き、友達として悲しく思ったのは確かだ。だがその想いは今は関係ないので脇に置いておき、問題は記憶喪失のサイカなら魔術勝負で勝てるのでは？　と思ってしまうことに尽きるだろう。そして魔術で初めて優越感に浸れるかもしれない、と突き進んだ結果がこれだった。要は自業自得である。

イグルの魔術を知るユリスは彼に憐みの視線を送る。心に深く突き刺さり凄く痛かった。

思わず目配せでリオンに助けを求めた。そんな視線に気付いたりオンは柔らかに微笑む。

「イグルの魔術は孤児院　屈指だよ」

「そうなのか？　なら本気で期待できるな」

（ハードル上げやがったあああああ！！）

期待を隠しきれない様子のサイカに、イグルは崩れ落ちそうになった。その体は怒りや緊張やらで小刻みに震えている。

よりにもよって孤児院　屈指の『しよぼさ』という単語を抜かせてくれるとは。お蔭で一気に崖っぷちである。

こうなれば魔力で補うしかない、とイグルは覚悟を決める。

竜人族という種は他の人類よりも魔力筋力ともに大きく上回っている。例え魔術行使が稚拙であろうと出力を上げれば見栄えは良くなる筈だ。

そしてイグルは魔術を行使する。

アカシックレコードの末端に接続。情報を取得し現実に出だし、此処に魔術を顕現する。

イグルは掌を大きく開き、初歩の魔術には不釣り合いなほどの魔力を注ぎ込んだ。

炎が燃え盛る。大人の拳ほどもある赤い火だ。

それは手品の方がまだ派手と言えるほどの地味さだった。

所詮は初歩、この世界のライター代わりの魔術である。いくら魔力を注ぎ込んだ所でたかが知れていた。

——終わった、さよなら俺の威厳。イグルは静かに嘆いたと言う。

「これが魔術かあ。凄いもんだね」

その言葉は初め、あまりの下手さに対する嫌味かと思った。だが火の魔術に向けるサイカの視線は興味の色が濃くある。

実際サイカはイグルの魔術に興味津々だ。少し地味とは思いつつも、初めて見る魔術に浮かれている。

「へ？ ……へ、へへ、まあこんな物だぜ！ まいったか！」

「ああまいった。良いものを見せて貰ったよ」

魔術を消して虚勢を張る。

良心の呵責に苛まれたが、素直な称賛を浴びることが出来たので結果オーライとした。

「ねえお兄ちゃん、もしかして凄い魔術もつと見たい？」

「うん？ そうだね、もつと色々と見てみたいな」

「それじゃ、あたしの飛び切りを見せてあげるね！」

魔術に対するサイカの好奇心を過敏に感じ取ったユリスは、張り切って魔術を行使する。

末端への接続を開始、奥深くまで潜り膨大な情報を取得し、現実^{キワド}に顕現するための詠唱を口ずさむ。

「第四の状態を現し示せ、プラズムブロム！」

頭上に上げたユリスの手の上、五メートル近い巨大な青白い球体が形作られた。周囲に放電現象をまき散らしているその正体は、高エネルギーのプラズマである。

唐突に現れた大魔術に室内は関係なかった人達まで巻き込み騒然とした。そんな中、元凶であるユリスは屈託ない笑顔をサイカに向ける。

「どうかなお兄ちゃん？」

「あ、ああうん、物凄いね」

プラズムブロムのあまりの威圧感に、サイカは半ば放心していた。

「って和気藹々と兄妹トークしてんじゃねえ！ 室内でなんて魔術

使ってやる！」

「ユリス、早くそれを消すんだ。間違っても放ったりしちゃ駄目だよ。絶対だからね！」

慌てて止めに掛かるイグルとリオン。こんな大魔術が放たれた日にはこの孤児院に巨大な風穴が空いてしまつと必死だ。

シルヴァ国屈指の魔術師アーシェ。そんな彼女の子供であるユリスはその才能を十全以上に受け継いでいた。

色鮮やかな花が咲く花壇や所々に生える木を見ながら、サイカは裏庭と言える場所を歩いていった。

同行者は居ない。ユリスはプラズマを作り上げたことでジョシアに説教されているし、イグルとリオン共あの後すぐに別れた。そして立ち代り入れ替わりに室内の少年少女達から挨拶されたり、遊ばうと引つ張られたり、実際に遊んで盛大に疲れたりした。

相手は子供と侮るなかれ。異種族の種族補正ないし魔力強化により体力が半端ないのだ。サイカ自身が子供の体である以上、相手に並みの成人男性以上の体力まで強化されては対抗など出来なかった。例えば駆けっこしたなら軽く最下位である。

今のサイカより遥か歳下の子にまで敗けた時など、これは早めに魔力強化できるよう練習すべきかもしれない。と焦りながら思索したものだ。

それはともかく疲れた体の骨休めも兼ね、現在は孤児院の敷地内

を適当に散策していた。

そして、ふと音が聞こえた。

耳を澄まさなければ聞き逃すほど小さい、風切り音のような音。それが断続的に響いてくる。

気になって音のする方向に行き、建物で死角に成っている場所まで足を進めた。

——ビュオン、一層激しい風切り音が鳴る。

その場にいたのは少女だった。明るい茶髪で、おそらく同世代くらいで、昨日サイカをあの家まで連れて来た少女だ。

そして彼女はブラウスにハーフパンツというラフな格好で、武闘を踊っていた。

蹴りを放てば風圧で地面の砂が巻き上がり、腕を振るえば空気を引き裂く音が鳴り響く。馬鹿馬鹿しい程の力強さを問答無用に感じさせられ、目が離せなくなる。

この時サイカは、確かに彼女に見惚れていた。

「ふう……………それで、なんか用？」

唐突に武闘を止め、サイカに声を掛けて来た。

「えっ！？ ……あ、や、特に用があつて来た訳じゃないけど」

「じゃあ何の用もなくここまで来たんだ」

呆れ気味にサイカを見据え、彼女は魔術でピンポン玉程度の水球を作った。それを口に含み飲み込む。

飲料水の調達に魔術を使っただろう。やはり魔術は便利そうだ。サイカは緊張していた気持ちを落ち着け口を開いた。

「散策して立ち寄っただけだからさ。でも君にはもう一度会ってお礼を言おうと思ってたから丁度良かった。ありがとな、君のお蔭で無事に家に帰れたよ」

「そっぴや 안타記憶失ったんだっけ」

「だから助かったよ。きっと俺一人なら家まで辿り着けなかった。ところで名前を教えて貰って良いかな。本当に悪いんだけど、憶えてなくてさ」

「別に謝られるほど仲良かった訳じゃないけどね。シアフィール、適当に呼んで」

「ん、じゃシアで」

……安直、と呟きシアが半眼になる。
シアフィールという名を呼ぶには長かったので区切ってみたのだが、そこまで変だろうか。

「嫌ならやめるけど」

「嫌って訳じゃないよ。そう呼ぶ人もけっこう居たし」

「そっ？　なら良かった」

と思いつつ、それならどうして半眼になったのかと首を捻る。
本当にただ単に安直だったからだろうか。確かに安直であることは否定できないが。

「ところでアンタ昨日、私が殴ったとき躲してたよね。魔術ばつかだと思ってたけど、割とそういうこともできんの？」

「自覚はないけど、そうみたいだね」

「ふーん？」

シアはサイカを観察する。

立ち振る舞いからしてやはり素人だ。武や戦に精通した人間とは思えないほどの棒立ちである。手加減していたとはいえ、どうして昨日避けられたのか解らないほど素人然としていた。

試しに拳を握り、軽く振るってみた。

突然の奇襲を認めたサイカの体は瞬時に脱力し、体を捻って半身になり拳を躲す。

あんな拙い体位から躲すその技量にシアは瞠目した。手加減していたとは言え恐ろしいまでの危機対処能力だ。

当のサイカ本人はシアの突然の奇行に啞然としているが。

「……ちよつと、待とう。どうして殴ったの？」

「少し試してみようかと」

「本気でやめてね！？ 人間って割と脆い生き物だからね！？ それ当たったら死ぬからな！」

ちなみにサイカの言うそれとは武闘中であつたシアの拳である。

先ほどの手加減した拳位なら打撲程度で済んだらう。

冷静に思い返せばそれくらいは解つただらうが、今のサイカはいささか判断能力が低下していた。とはいえ殴ること自体を止めて欲

しいサイカとしては、どちらにせよ抗議していただろうが。

「それよりいつもならアンタらもう帰ってる頃だけど、時間良いの？」

「それよりって……まあ帰る時間は知らなかったね。一旦戻ってみるよ」

「そうすれば。じゃ、さようなら」

「ああうん、またね」

軽く手を振ってその場を去るサイカ。

それを見送りながらシアは、またね、と言っ言葉に眉根を寄せる。あの武闘を見たり、二度も殴られかけたりしたにも関わらず、またね、と言った。シアの人生でそれは割と珍しいことだった。

どうやらサイカは記憶喪失に伴い、性格からして変わっているらしい。

奇特的な奴、と思いながら自分も部屋に戻ることにした。

「辛かったよー、足痛かったよー」

「よしよし、よく頑張ったね」

「うん、あたし頑張って耐えた」

サイカはユリスの頭を撫でる。

現在彼らは孤児院からの帰り道である大通りを歩いていた。そしてユリスは精根尽き果てたかのように力なく歩いていた。

ユリスの話によるとジョシユアの説教は壮絶を極めたそうだ。何時間も正座させられ、延々と常識を諭されていたのだと言う。お蔭で説教直後は立てない程であつたらしい。

その所為か説教後ユリスの友人たちに快方されたが、ついぞあの広い部屋には戻れなかった。今でも痺れが残っているほどのだから、余程辛い説教だったのだろう。

妹の有様を見てジョシユアには説教されないようにしよう、とサイカも心に刻んでいた。

それにしても夕方なだけあり、大通りにはそれなりに人通りがある。サイカ達と同様に帰路へと付いている人も多いのだろうか。そう考えつつ辺りを見回すと、知った顔が二人並んで歩いているのを見つける。

「イグルにリオン？」

「あれ、サイカにユリス？」

「なんだ、もう帰る時間かよ？」

「うんそうだよ説教だけで時間が潰れちゃったよー。あたしがこんなに頑張つてジョシユアお爺ちゃんの有り難いお話に耐えてる中、二人は外で悠々自適に過ごしてたんだね？」

「お前のは自業自得だろうが。つか俺らもただ遊んできてたんじゃねえよ」

イグルの言葉が示す通り、彼らはただ遊びに行ったのではないの
だろう。それだけ彼らが今身に付けている衣服は物々しい。

イグルは軽そうな鎧を着こみ、剣を背負っている。リオンも皮の
鎧を身に付け、弓を担いでいる。まるでどこかに戦いに行つて来た
かのような装備だ。

「凄い恰好してるけど、二人とも何して来たんだ？」

「僕は二人で冒険者やってね。今回はウェアウルフを3匹ほど
狩つて来たんだよ」

「まだ駆け出しだから大した魔物は狩れないけどな」

「えっ、充分凄いつて。魔物を狩るつて命掛けなんだろう？ 俺はち
と自信ないかな」

「えー、でもお兄ちゃんオーク倒したんでしょ？ 冒険者くらい楽
勝だつてー」

ユリスの言葉にイグルとリオンが若干驚きつつも苦笑いした。

「そりゃ凄いと思うけどよ、あまり無理言つなつて。今のサイカは
魔術使えねえだろうが」

「違うよ！ 魔術使えなくなった後に倒してきたんだよ！」

ユリスの言葉に二人の苦笑いが固まり、沈黙が舞い降りた。

「……サイカ？ ユリスはそう言ってるけど、本当に？」

「うん、まあ……そんなこともあったね」

それにどうだ見たかとユリスが胸を張り、冒険者二人はあまりの予想外さに哑然とした。

サイカはと言えば、薄々感じてたけどユリスってお兄ちゃんっ子なんだなあと諦観の最中にいる。端的に言って自分が本物のサイカでないことの罪悪感がぶり返していたりした。

その間に冷静さを取り戻したりオンはにこやかに笑う。

「サイカどうだい、僕たちと冒険者やらないかい」

「はい？」

「なるほど、それだ！俺たちと一緒に冒険者やろうぜ！なに、魔術が使えなくても俺達にはリオンがいる。だから遠慮するなというかむしろ大歓迎だ！」

「はああ！？」

訳がわからない。というより唐突過ぎる。

ユリスは隣でふふん仕方のない奴め、と言った感じの表情をしているが、サイカとしてはその顔やめて、と言った心境である。

「……と言っるのは冗談だけだし。将来やることなかったら考えてみてよ」

さすがに突然すぎたかと思いいリオンはフォローを入れ、その言葉にサイカは安堵の息を吐く。

ちなみにイグルの「えっ」という呟きは聞こえなかったことにし

た。

そもそもサイカは冒険者がどういう仕事かさえわからない。この世界のこともあまり知らない。こんな状態で将来のことなど決められる訳がないのだ。

ただ少なくとも冒険者は魔物を狩ることがあり、それは当然命が掛かる。そんな危ない仕事をするのは少し気が引ける。

だが同時に冒険と言言葉に心惹かれる部分もなくはなかった。より正確に言えば、この世界がどういう世界なのか見てみたいという願望がないでもないのだ。

とはいえ元のサイカの身内から離れるような事はしたくない。それに命を危険に晒すのはやはり御免なため、冒険者をやりたいとは思えないのだが。

「ありがと、どうするかはわからないけど考えてみるよ」

「うん、まあ気負わずに考えて」

リオンの優しさが痛み入る。

イグルも「別に今から冒険者しても構わないんだぜ？」と口に出しつつ、意味あり気に横目で見て来たため、丁重に「御免こうむる」と笑顔で返しておいた。

「と、そろそろ門限がやべえわ。悪いけどもう帰るな」

「そうだったね。それじゃ二人とも、またね」

「そか、じゃあまたな」

「じゃあまたなー」

そうして兄妹と冒険者二人は別々の帰路に着く。
その兄妹の帰り道、ユリスと取り留めのない会話をしながらサイ
力は思った。

自分はこれから一体どう生きて行くのだろうか、と。

1話 孤児院にて（後書き）

妹とシアの髪の色を変更、というより交換しました。

2話 魔法具店

翌日も兄弟揃って孤児院行きと相成った。

ちなみにアーシェは相変わらず仕事の修羅場である。

今日は残念ながらイグルとリオンは冒険者しているらしく居なかった。

ユリスも同年代の友達、つまり十歳前後の少年少女達と遊んでいる。

サイカは元のサイカと友人であっただろう人達と遊んだ。

ちなみに過去形である。今日はサッカーと言うまんまサッカーもどきの球技をしていたのだが、サイカは誰よりも早く体力不足でダウンした。魔力による体力強化を身に付けねば遊びすらままならないらしい。

むしろ怪我をしなかっただけ行幸か。人によってはただのシュートが殺人技にまで昇華されていたのだから。

それにしてもルールがあまりに地球のサッカーと似ていたのだが、これは偶然だろうか。もしかしたらサイカ同様、過去に地球から来た人が居たのかもしれない。そしてサッカーという球技を普及したのかもしれない。

地球か、と故郷に想いを馳せる。

日本に戻りたいかと問われれば、サイカは判断に迷うだろう。だが仮に戻りたいと思ったとして、本当に戻ろうとは思わない。

理由は幾つかある。

既に朝霧 潤也の体はなくサイカの体だから。

サイカの身内がこの世界にはいるから。

そして何よりも、朝霧 潤也の両親がとうの昔に死んでいたことが大きいだろう。

引き取って貰った親戚の人達にはそれなりに良くして貰ったが、家族ではなかった。

友人はそれなりに居たが、親友と呼べる人はいなかった。

ついでに言えば恋人もいなかった。

つまるところ朝霧 潤也には、大切だと胸を張って言える人が居ないのだ。

サイカは深く考えるのをやめる。

どうせ帰る当てもないし、潤也の体がサイカである以上は帰れない。

地球について調べたい気持ちがないでもないが、別に今すぐ調べようとも思わなかった。

それはともかく、現在は休憩がてらに孤児院の庭を出歩いている。建物の裏の敷地まで足を進めた。昨日同様、そこには四肢で大気を切り裂きながら武闘を踊っているシアがいた。

「こんにちは、シア」

サイカに気付き、シアが意外そうな表情をする。

武闘を止めた。

「アンタか。まさかわざわざ来るなんて思わなかったけど、何か用？」

「シアいるかなと思って顔を出してみた？ あるいは体を休めに来た」

「特に用事はなしと。訓練続けて良い？」

「どうぞお構いなく。」

「……俺っていい方が良い？」

「純粋にどっちでもいいだけ。でも訓練はするし、暇じゃない？
それで文句言われても困るからね」

「言わないよ。シアの訓練してる所は凄そうだし見てて飽きないだろうしね」

「む……私って武術なんてやってないから我流だよ。そんな良い物じゃないでしょ」

「そうなのか？ 素人眼から見るとさっきのとか凄そうだったけど」

「馬鹿力だからね。その所為で凄く見えるんですよ」

「そうか？ でも確かに力自体も凄いんだよね……あれって魔力で強化してるから？」

「両方。素でも力は強いし、魔力強化も得意だからね」

シアは細身であり見た目はさほど力が強そうに見えないのだが、
どうやら見た目とは裏腹らしい。

「ちなみにシアって俺と一緒にの種族だよな」

「……私って、そんなに人種に見えないわけ？」

シアが怒気を孕ませた目でサイカを睨みつける。
背筋に冷たい物が走った。

「いえ決してそのような訳ではただの確認ですごめんなさい」

サイカは即座に謝った。

何か地雷を踏んだのかと大慌てである。

簡単に屈して威厳はないのかと言われるかもしれないが、冷や汗が止まらないので仕方がない。

そんなサイカを見てシアはため息を吐いた。

若干バカらしくなったとも言える。

「別に良いけどね。それがどうかしたの」

「それがって訳じゃないけど、俺っていま魔力強化を勉強中でさ。それでシアって力が強いから魔力強化が上手んじゃないかと。端的に言えば魔力強化が上手くなるようアドバイス貰えないかなって」

「それ種族関係ないよね？」

「……そつすね、ごめんなさい」

よく考えればシアは訓練をしているのだ。か弱い訳がない。

あの細身からは想像もつかない様な筋肉の付き方をしているのだろつ。それなら素で力が強いのも納得だ、とサイカは自身でそう考え込ませることにした。

「魔力強化に対するアドバイスだっけ。アンタ魔力流動は出来る？」

「多少なら」

「なら常に魔力を体内で移動させ続けてみたら。魔力で全身を何週もさせれば、その内 自然に魔力強化が上手くなるでしょ」

「そういう具体的な練習はしたことがなかったな。うんやってみる！」

「じゃ、私も訓練を再開するから」

「ああ、ありがと！」

シアは武闘を再開し、サイカは壁際にあるベンチまで歩いて座った。

今のサイカでは集中しなければ魔力を扱えない。そのため立っているより体に力の入らない座った状態で魔力流動を扱う方がやり易いのだ。

シアはその姿を横目で眺めながらも自分の訓練に専念し始める。

想定するのはいつも通りの一対多の戦闘。魔力で強化した四肢で仮想敵に全力の致命打を打っていく。

並みの者なら数分で倒れるだろう激しい動きを、しかしシアは涼しい表情で淡々と繰り返し続けていた。

相変わらずの力強い武闘だ。荒事には慣れていないサイカだが、あれだけの武闘を見せられれば自分も、と僅かながらでも思っつまう。

それにせつかくの異世界、と言うには不謹慎だが。今のサイカは魔術が使えないのだ。せめて魔力流動くらい物にしたいという想いがあった。

丹田から魔力を引き出す。まずは胴体から頭へと魔力を移動させる。出来たら次に右腕に、そして右足に、続いて左足、左腕と全身をくまなく移動させ、そして頭に戻る。

たかだかこれだけの魔力流動で途方もない集中力を要した。

力任せに全身へ魔力を行き渡らせる方が遥かに簡単だ。それでさえ動きながらでは集中し切れず魔力強化を維持し切れないのだから先は長い。

泣き言を言っても前には進めない。

こればかりは地道にやっていくしかないだろう。

気を取り直して魔力流動を起こし全身を移動させていく。流動させるコツを少しずつ掴みながら、その分だけ移動させる速度を速める。

全身を何週も繰り返し魔力を流動させる。

サイカはこの間、ただひたすらに魔力の流動のみを見つめ続けた。

魔力流動による体内での回転速度は上昇した。

長時間の魔力流動によりサイカは魔力をある程度は操れるようになった。これならば魔力強化しながらの運動も少しくらい可能だろう。

だが未だに荒い部分が多い。それを削るべく集中に集中を重ね、目さえ瞑り体内に没入し、体内で魔力を流動させていた。

「てい」

そのためにサイカは気付かなかった。あまりの集中により周りが

見えず、シアの手刀が頭に迫っていたことに。

しかしサイカの体は当然の如く察知し、サイカの意味とは無関係に首を傾げる。それだけでシアの手刀を避けてみせた。

「どうして目を瞑ってて躲さんのよ……」

「どうしてチョップしてきたんだよ……」

互いにじと眼で睨み合い、しばらく膠着状態が続く。

やがて互いの言葉をスルーすることで互いに妥協した。

「私はこれで今日の訓練は終わり。これから買い物に行こうと思ってるけど、アンタはどうすんの？」

「それなら室内に戻ろうかな。魔力は減ったけど体は充分回復したからね」

ベンチから立ち上がり伸びをする。

長い間座っていたため、間接が硬かった。

「それにしても買い物って何買いに行くんだ？」

「良い魔法具がないか見に行こうと思って」

「俺も行く」

あまりの切り返しの速さにシアは一瞬 啞然とする。

「……良いけど、室内に戻るんじゃないの？」

「それより魔法具 見てみたい」

さわやかな笑顔でサイカは言い切った。

現在サイカの興味は魔法具に集約されたと言っても過言ではなかった。

何せ異世界 特有の産物だ。例え見るだけでも十分に楽しめるだろう。

それに考えてみればサイカは未だ異世界のお店に入ったことがない。

この機会に家と孤児院以外を見て回るのも良いだろうと考えていた。

「そう、じゃあ、行こうか」

「さっそく行こう！」

サイカが楽しみにしているのがシアにも伝わってくる。

なんだか釈然としない気分であるし、何がそんなに楽しみなのかシアにはまるでわからなかった。だがまあ楽しんでるなら良いか、と気にしないことにした。

サイカとシアは連れだって魔法具店に入った。

店の内装は広く明るく、魔法具だろう様々な物品が見栄え良く並んでいる。

どうやら用途によって区分けされているようだ。商品の近くにあ

る厚紙には、その用途の説明が書かれていた。

サイカは近くにあった、先端に白い石が付いている黒い筒状の道具に目を向ける。説明書きには『ライト』と書かれている。日本で言う懐中電灯のような物だろうか。

それ以前に自分が何故この文字を読めるのか、と言う事にサイカは首を傾げた。

文字が明らかに日本語ではない。

角張った形態をした文字で、少なくともサイカの知識にはない文字体系だった。

けれど自然に読めてしまう。

この調子ならもしかすると、言葉も気付いていないだけで日本語ではないのかもしれない。

どうして知らない文字が解るのか。

サイカの体だからか、謎の高技術の恩恵か、はたまた別の要素があるのか。

考えても答えは出そうにない。

特に害もなさそうなので考えることを放棄した。

折角なのでライトを手取る。

ざらざらとした触感で重量は少し重めだ。品質では懐中電灯の方が上らしい。

それはともかくいざ点灯、と意気込んだサイカはすぐさま困り果てた。

スイッチがない。上下左右からライトを見回してもスイッチが見つからなかった。

物は試しと筒にはめ込まれている白い石に触れてみる。無反応。

「……何やってんの？」

気付けばシアに変な目で見られていた。

「このライトの使い方がわからなくてさ」

「なるほどそういうこと、魔力込めれば点くよ」

シアの助言を参考に手先へと魔力を流動させる。此処までの時点で反応はなし。

ライト自体に魔力を移動させなければならぬのかと、手先の魔力を外に押し出すように流動させた。筒の先端から淡く白い光が発せられた。

「おー、本当だ光った」

「そんなので感動してどうすんの」

「珍しい物を使って感動するのは当然だって」

「珍しくないから。アンタが忘れてるだけでしょ」

魔法具なんて本当に知らないんだけどね、と思いつつも口には出さず値札を見た。

初魔法具記念に安かったら買って行こうと言う魂胆だった。

価格50000ダラム。

ちなみにダラムは日本で言う円である。

この値段はサイカが調べた限りの物価から鑑みてそれほど高くはない。だがサイカがこのライトを買うには少々足踏みしてしまう程

度には高い。何せ家に貯蓄されていたサイカの財産はおよそ6000ダラム。ライトに財産の大半を使い込む勇気はさすがになかった。所詮は13歳と判明したこの身だ。お小遣いはさほど高くない。当然だろう。

バイトってこの歳でも出来るのかなあ、と考えを巡らせるには充分な事件だった。

泣く泣くライトを手放す。

シアが店内の奥へと進んで行くようだったので大人しく付いて行くことにした。

着いたのは魔法具の中でも特に貴重な品が置いてある区画だ。煌びやかな装飾品や刃物など特殊な魔力を持つ小さな品々が並べられている。とりあえずサイカの全財産の100倍以上なんて商品がざらにあった。

まだこの世界の物価に疎いサイカだが、さすがに手軽に触れるような気は起きない。

間違つて壊してもしたら大事なので見るだけで満足することにした。隣で何の躊躇いもなく手に取り品定めしているシアも居るが。しかもけっこう大雑把に扱われているのを見て少し冷や汗が流れる。怖い物知らずな年頃と言うにも限度つて物が……などと肉体年齢的には一歳年上だったりするシアに向けて失礼なことを思い浮かべた。更にシアの品定めは続き、次の商品に移る。

半透明で拳程度の大きさの玉で、玉内では空色が不定形に蠢いていた。

商品名『夢玉』。

近くに置いて眠ると不思議な夢を魅ることが出来る。

お値段700万ダラム。

空色の玉に対する説明書きを流し読みしたサイカはお金の世知辛

さに肩を落とす。

不思議な夢には興味を引かれるがとても買える値段ではない。

そんなサイカを尻目に、シアは夢玉を持って受付の女性の所まで歩いて行った。

「すみません、これください」

「かしこまりました。700万ダラム頂戴いたします」

「はい」

白貨。この世界で最も高価なお金をシアは七枚ほど無造作に転がした。

十四歳程度の少女がこんな大金をさらって出すことに受付の女性はピクリと反応するが、すぐさま営業スマイルを貼り付ける。

「こちらが商品になります」

紙袋に詰めた商品をシアへと手渡した。

商品を持って戻ってくるシア。開いた口が塞がらないってこういう感じなのか、とサイカは悟りながらそのまま言葉を発することにした。

「……シアって金持ちなんだな」

「そうでもないよ。昔の貯金が残ってるだけ」

あれだけの大金を軽く出せるってどれだけ貯金が残っているのだろうか。もしかして孤児院に来る前は金持ちの家に居たのかと邪推してしまうサイカだった。

夕方に大通りを通って帰路に着く。

あの夢玉以降は何を買うでもなく二人揃ってのウィンドウショッピングだった。サイカは金欠にで、シアは興味をそえられる商品がなかったためだ。

買い物は出来ずとも、サイカとしては異文化に触れただけで十分に楽しめた。とりあえずお金が貯まったら何か魔法具買ってみようと思う程度には興味を惹かれている。

そして当然シアの買った夢玉も気になっていた。

「夢玉使ったら不思議な夢を見れるんだよなあ。あとでどんな夢だったか教えてね」

「別に良いけど、そこまで気になるもの？」

「夢玉自体も気になるし、700万もする品物だからね。どんな凄い夢なのか気になるよ」

「そんな物かな。まあ物珍しいのが見れば私も嬉しいけどね」

あまりに興味深々なサイカに、シアは小さく息を吐く。

確かにこの夢玉は高級品だ。不思議な夢見を体感できるというのは気になる。だがそれにしだってサイカのはいささか大げさ過ぎやしないかと思うのだ。

「そんなに気になるなら後で貸しても良いけど？」

「え、本当に？ それは嬉しいけど、でも700万もする物だし本当に良いのか……？」

予想外のシアの言葉にサイカは狼狽えた。

夢玉は使ってみたい。だが借りるのは腰が引ける。だつて700万だ。傷ついたらどうしよう。そう考えてしまつのは、潤也の時から小市民であつたサイカの性と言えるだろう。

「当然私が使つた後ね。場合によってはかなり先」

「貸してくれるってだけでも嬉しいよ。うん、そうだなせつかくだから楽しみに待つてゐるね」

「あと怖い系の不思議な夢なら押し付ける」

「あーうん、高いんだから簡単に手放すのはやめようか。というか怖いのが苦手なの？」

「好きではないよ。苦手でもないけど」

嫌な夢を見るくらいなら要らない。強がりでもなんでもなく、そんな単純な考えだつた。

サイカとしてもそれは理解できるのだが、高級な趣向品を簡単に手放すなどやはり金銭感覚が狂っているのではないだろうか。未だにこの世界の物価を把握し切れていないサイカにすらそう思われているのだから、割と手遅れな所まで来ているのかもしれない。

「——あ」

唐突にシアが声を上げた。

足までも止めていた。

そんなシアの様子に訝しみ、彼女の視線を辿る。

黒ずんだ赤髪の男性が、同じく立ち止まりシアへと視線を向けていた。

黒い厚手の衣服を着ており、歳は三十後半程であろう。男の厳しい表情から威圧的な印象を受ける。そして彼の右手の中指に填められた、ひたすらに黒い指輪が特に目を引いた。

「久しぶりだな、シアフィール。元気そうで何よりだ」

「……そうですね。お久しぶりです、アドリスさん」

「このタイミングで会ったのも何かの縁か。
協力して欲しい件がある。準備期間はどの程度 必要だ？」

「今からで構いませんよ」

肩を竦めながら抑揚の無い声でシアは答えた。

どうやらアドリスという男はシアの知り合いのようだ。妙に硬い雰囲気や二人で醸し出している所為で、これがどういう知り合いか聞くのが戸惑われた。

「という訳だからここで解散だね」

クルッと振り向いてシアが言ってくる。

「あ、うん、そう……なのか？」

「そうなの、それじゃさようなら」

どういう事情なのか気になったが、変に引き止めるのもおかしいかと普通に返すことにした。

「ん、そっか。それじゃ、またね」

そう返事を返すと、手をひらひらと振りながらシアはアドリスの方へと歩いて行く。

アドリスの所まで辿り着き、二人で何処かに向けて歩き出した。その姿を途中まで見送って、サイカも再び帰路に着こうとした。

「あ、そだ」

そんな呟きと共に不意に振り返ったシアが、夢玉の入った紙袋をサイカへと放り投げた。

「えええ！？」

慌てて受け取った。落ちたら700万ダラムというプレッシャーを原動力に最大限の慎重さでしっかりと抱き止めた。

これは一体どういうだ、と混乱しながらシアを見る。

「持ち歩くの邪魔だからあげる。それじゃあ今度こそさようなら」

シアはすぐに止まっていた足を動かし始める。それを引き止める間もなく、彼女の後ろ姿をサイカは呆然と見送った。

そしてサイカが我に返った時、腕の中にある高級過ぎる品をどう扱うかで頭を痛めることになった。

表情が抜け落ちているシアと、硬い表情を崩さないアドリス。並んで歩く二人の間には温かみの雰囲気と言う物が存在しなかった。

「それで例の件について聞いて良いですか？」

「そうだな、概要だけでも話しておこうか。」

この街に道化師が来たと言う情報は知っているな？ 今回の件と言うのは道化師の調査、及び可能性ならば捕縛だ」

「捕縛ですか。自殺するなら私を巻き込まないで欲しいんですが」

「心配せずとも私とてまだ死ぬ気はない。道化には出会わないよう調査するつもりだ。あんな化物を捕縛などとふざけているとしか言い様がないからな」

「アドリスさんも随分な言い様ですけどね。でも概ね賛成です」

道化師が関わっている。その事実にも関わらず、シアは自分でも意外なほど淡泊な反応だった。

彼女にしてみれば道化師とは、家族を殺し自身を孤児院に追いやった怨敵である。

少なくとも客観的に見て、彼の道化には恨みを抱かない要素が見当たらない。

だが実際は憎悪と呼べる程に上等な、或いは下等な感情などは胸の内になかった。

ただ道化師と関わるのは危険。そう思う程度だ。

何故こんなにも淡泊なのか、とは思わない。

理由はなんとなく解っている。薄々は勘付いていた。

要するに、シアフィールは家族に対する愛情が希薄だったのだらう。

思い返せば上辺だけの親しみで、家族ごっこみたいな関係だったように思う。

もっとも孤児院の住人達とはそのごっこすら成り立っていなかったりするのだから、当時はそれでもまだマシだったのかもしれない。しかしこうして鑑みると、つくづく情愛と言う物に縁がない人生だな、と苦笑した。

「それにしても君も運がない。このような場所で私に再会するなど、神に見放されているとしか思えんよ」

「まあ真つ当な神霊に祝福されるようなことはしてないですからね」

「それは確かに違いない。しかし本当に準備期間を設けなくても良いのか？ 今の住処から持って行く物はないと？ 別れの挨拶も不要か？」

「あまり荷物を増やしても仕方ないですし、それほど親しい人もいませんから」

2話 魔法具店（後書き）

旧2話を1話と旧3話に分散！
切りが悪かったのでツギハギしました。
結果が1話と現2話です。

3話 剣の特訓……の筈でした

「ウサギは寂しいと死んじゃうのよ」

唐突かつ場違いな言葉だった。

発言者は沢渡 瑞葉、十九歳。大学一年生。身長は女性の割に高く、プロポーションもモデルに準ずる程度には良く、茶髪に染めている髪は軽くウェーブが掛かっている女性である。

朝霧 潤也のお世話になっている親戚の子供に当り、姉代わりと言って良い人だ。

そんな彼女は高校の寮の門前で仁王立ちしていた。とりあえずウサギとか寂しいとか死んじゃうとかの雰囲気は微塵もないくらいには堂々としていた。

「瑞姉、寮に帰れないよ」

「家に帰れば良いと思うよ。っていつかあたしの言葉を無視すんなよ」

につこりと華の様に笑う瑞葉。潤也が高校に入学する折、寮に引っ越したことが気に入らないようだった。しかもう高校三年生なので今更である。

あとウサギ云々をスルーされたこともご立腹の模様。

「でもウサギとか明らかに今関係ないよね？」

「何を言うか、あたしとか明らかにウサギ系じゃんか！ 寂しくて死ぬタイプじゃんか！」

「人参嫌いのウサギは居ないと思うんだ。あとウサギ語るならもつと背が低い方が良いんじゃないかと」

「寂しくて死ぬって所に着目して！」

寂しそうな雰囲気もまったくない。

だが仕方なしに、もとい無意味に瑞葉の言葉を潤也は信じることにした。柔らかく優しくに笑い、今の瑞葉に相応しい言葉を投げかける。

「大丈夫だよ瑞姉。寂しいと死んでしまうような心の病でも、この辺りの精神科ならちゃんと付き合ってくれるよ」

「真面目に会話して！？」

「いや瑞姉の一言目からそんなものは木端微塵だからね」

「そんなことはどうでも良いのよ。あれこれ言っても最終的にあなたが言いたいことは一つだけ、潤也家戻れ。これだけよこの家出弟が！ 姉に寂しい思いさせるとは何事か！」

「いや家出って。俺はこのまま社会に出て自立するつもりだけど」

「あたしより先に自立するとか生意気なことは後にして、潤也は弟らしくしてなさい！」

「自立だけで生意気とか瑞姉の弟像がとても気になるんだけど！
あと血縁上は他人だ」

「水も時には血より濃いのだよ！」

「それ訳わかんないよ！」

要約すると似非姉弟の会話は『家に戻れ』『嫌です』の二言で片付いたりする。このまま会話を続けても互いに譲らず平行線を辿るのだから本当に二言で十分である。

この遣り取りは二人にとって本当に代わり映えのない内容だ。もはや日常の一片とさえ言えるかもしれない。

とはいえ日常なんて物は連続しているからその日常であり、時として前触れもなく途切れて壊れることも多い。というより始まりがあれば終わりがあるので、いつか終わるのは確定的である。

だからいつか訪れる、或いはいつか訪れたかもしれない日常の終わりは例えばそんな可能性だった。

「訳がわからなくても良いよ」

とは言えそんな例えばの可能性など二人は露ほども思い浮かべない。まあ当然である。だからこれ以降もこの日常を二人は謳歌し続ける。具体的には潤也の背後に回り込んだ瑞葉が彼の首に腕を回し、見事なチョークスリーパーを決めていた。

「だから力付くで連れて帰る！ とりあえず夕飯食べてけこの野郎！」

「ちょっと！？ 待つ、ぐる、じ！」

潤也はずるずると引きずるようにして連れて行かれる。

背後から伝わる胸の感触に焦っている所為もあり、抵抗虚しく瑞葉に良い様にされていた。

ただし苦しそうなのは本当である。元来チヨークスリーパーとは苦しい技であるが故に。

そんな二人のじゃれ合いを背景に、世界は次第にその輪郭をぼやけさせて行く。

まるでピントが合わなくなって来たかのよう。

二人の声までもが遠い。

色彩が白く染まって行く。

それは所謂、夢の終わりであつた。

サイカは目を覚ます。

ベッドから上半身を起こし、寝ぼけた状態で簡素な部屋を見回した。その見回した視界の内には、ベッドの近くに置かれた夢玉入りの紙袋もあつた。

時間が経ち眠気も少し飛んで頭が働いて来る。

「……………そうか、夢か」

サイカはこの世界に来て、もっとも大きなため息を吐いた。

脱力感到苛まれながらサイカはリビング代わりの部屋に入る。部

屋のテーブルには既に朝食が並んでいた。パンにハムを挟んだ食べ物にミルクだ。

朝食を確認した所で、台所にて調理用具を洗っている母アーシェと眼が合った。

「あら、おはようサイカ。ちょっと待っててね」

「おはよう」

いそいそとアーシェは大きな椀に魔術で水を注ぐ。水道がないため魔術失陥のサイカ一人では顔を洗うにも他の人より不自由するのだ。そのためサイカとなって以来、家族に力を借りることは多々あった。

「はいどうぞ」

「……ありがとう」

椀とタオルを受け取る。

顔を洗うことすら他人に助けられるのは潤也の頃からも経験がなく、慣れていない事柄で気恥しい。

サイカとしては外の井戸から水を汲み上げて顔を洗っても良かった。ただそれより早くアーシェが水を用意してくれるため、サイカもせっかくの好意を無碍に出来ず昨日も一昨日もこんな感じであった。

少し離れて顔を洗いタオルで水気を拭う。

使い終わった水はトイレまで行って流す。ちなみに当然だが水洗トイレではない。形こそ似通っているが、いわゆるぼっとんトイレという奴である。

ちなみにトイレの近くには手洗い用の受け皿があり、つい先日からその隣に水瓶が完備された。サイカが魔術失陥になる前は置かれる理由もなかった代物である。

ここで生活していると、文明の利器の偉大さと人々の優しさが毎に骨身に染みた。

サイカが改めてリビングに戻る。

その頃には妹のユリスも来ており、アーシェと共にテーブルの席に着いていた。

「あ、お兄ちゃんおはよう」

「おはようユリス。寝癖すごいことになってるよ」

事実ユリスの金の髪は疎らに乱れ、中には重力に逆らい跳ね返っている髪束まである始末だった。

「うあー、ご飯食べたら直す」

と言いつつ手櫛で無駄な努力をしながらユリスは憂鬱そうに肩を落とす。苦笑いしながらテーブルの席に着いた。

「それじゃ皆揃ったし頂きましょうか」

「いただきます！ 頂きます！」

「いただきます」

ユリスが一目散に食べ始め、次いでサイカがパンに齧りつく。最後にアーシェがゆったりと食事を取り始めた。

日本のパンよりはパサパサしているがまあ悪くない味である。パンの間にはハムだけでなくスラッグエッグの様な物も入っており、味が合わさって旨味が増していた。

「そういえば……母さん」

アーシエを母と呼ぶのに躓いてしまった。

潤也としての自意識が母と呼ぶことを戸惑ってしまったのだ。そもそも潤也は母を幼い頃失くしている。母さんなどと呼ぶこと自体に一種の気恥しさもあった。そのため不意に呼ぼうとした時、ボロが出てしまうことがあるのだ。

要注意、と自身に念押しした。

それはともかくアーシエに疑問である。

「今日はゆっくりしてるけど仕事休みなの？」

先日から今日までサイカ達が朝食を食べる頃にはどこかへ出かけていた彼女が此処にいる。しかもゆっくりしている。

朝食時であるこの光景は何気に今のサイカには初めてだ。

「ええ休みよ。だからサイカ、これを機に剣術を学んでみない？」

だから、の前後が繋がっていないと感じるのは気の所為か。

元のサイカが武術関連を学んでいたと言う話は聞かないから、その発言が余計に突飛に思えた。

「……えっと、なんでそうなったのさ」

「サイカはオーク倒した時、体が勝手に動いたって言ってたでしょ

う？ 自分の体なんだから、きちんと把握するべきだと思うのよ。それに街中でも物騒な場所はあるし、最低限でも身を守る術があった方が安心でしょう」

前のサイカであれば魔術があった。だがそれが失われた上に記憶喪失（と言うことになっている）のサイカは、原因不明の全自動体術を例外として考えると、客観的に見て酷く脆弱な存在である。

この街は日本ほど治安が良くない。

他の街に比べれば治安は良い方であるし、無用に他者を害する行為は基本的に罪に問われる。だがあくまでそれは現行犯の場合がほとんどだ。そして人死に出ようと民衆レベルの事は終わってしまったえば大抵は放置される傾向にある。

冒険者同士の争いも割と多い。盗人など裏通りに行けばそこらにいる。

比較的 平和な町とは言えこの現状である。魔術失陥のサイカには護身術くらいないと不安に思うのが親心であった。

「そう言うことなら。でも剣術を学ぶってことは、誰かに教えて貰えるんだよね？」

「私の知り合いに冒険者やってる人がいるから、その人に頼んでおいたわ」

既に過去形だった。

準備万全と言うか用意周到であった。

今日からやろうと誘うくらいであるし、予想して然るべきだったかもしれない。

「なんか、わざわざありがとう」

「どういたしまして。」

ユリスはどうする?」

「うえ!?! あ、あたしは良いよ行っても邪魔しちや悪いし孤児院に行かなくちゃ友達と遊ぶから! だからあたしのことは気にせず剣の特訓してきて孤児院から精一杯 応援するのがあたしの役割だからね!」

「そ、そう?」

どうやら来ない様である。

早口で拒絶している所から、もしかしたら行きたくないのかもしれない。

そして何故かサイカを潤んだ瞳で見つめ始めた。

「お兄ちゃん、あたし応援してるから………ちゃんと生きて帰ってね!」

「やっぱ俺 行くのやめる!」

妹の尋常でない反応にサイカは即座に前言撤回した。

「駄目よ、吐いたセリフは飲めないものなんだから。それに怯えるような場所じゃないわよ?」

「だけど……でもっ!」

ちらつとユリスを横目に見る。

捨てられた子犬を見るかのような憐憫の視線とかち合った。

行ったらきつと地獄を見る。サイカは既にそんな未来予想図を脳裏に描き出していた。

「ああもう泣き言はまず行ってからにしないで！ 何事も経験よ！」

どんな経験を積みまされるのか戦々恐々である。
安請け合いかつ早まったかもしれない。

アーシェに意気揚々と連れて来られたのは芝生が敷かれた広場だった。

人はそれなりに居るが、面積が広いだけに人口密度は酷く低い。
サイカは室内で剣の稽古をするのかと思っていたが、どうやら道場なんてそうある物でもないようだ。見られるのは気恥しいが、せっかくなので稽古に集中して気を紛らわそうと心に決める。

「ほらサイカ、あの人が朝に言った知り合いの冒険者よ」

「あの人が……」

サイカは自然と頬が引きつるのを自覚できた。

木刀を二本持った大柄な男がいた。肌は浅黒く、髪も墨汁を吸ったかのように黒く逆立った短髪で、瞳が深い黒。服装まで黒に統一した黒尽くめの男性だ。

ヤクザなど目じゃない程に厳つい顔は自然体にして鬼の形相と呼

べるだろう。泣く子も脇目を振らず逃げ出すような威圧感を纏い、その人物は腕組みし直立していた。

彼にとつての待ち人であろうサイカとアーシェに気付き、鋭い眼光を二人に向ける。純粹に怖い。

人を見た目で判断するべきではない。サイカとてその理屈は解っているつもりだ。だがそれでも出来るならば、剣のことなど忘れて回れ右したい気分だった。

そして非常に残念ながら、何事もなく冒険者の男の元まで辿り着く。

「ごめんなさい。待たせちゃったかしら」

「5分程度だ。気にするな」

「そう？　じゃあローレン。今日は息子をよろしくね」

「出来る限りはしよう」

旧知の仲同士の会話も程々に、アーシェは息子の背中を押し出した。

ローレンの前にサイカは立たされる。

「……サイカです。よろしくお願いします」

「ローレンだ。まずはこれを持て」

「あ、はい」

一本の木刀を手渡される。ローレンの持つ木刀より短めで、サイ

力の体格には丁度良い大きさに思えた。

「どの程度動けるか見る。自由に打ち込んで来い」

そう言うローレンは魔力強化を一瞬で済ませ、臨戦態勢に入る。どつしりと剣を構えサイカを待ち受けた。

そんなローレンにアーシェは苦笑いする。

対面してすぐあれでは面喰うだろう。もう少し前置きを入れた方が良いでしょう。だが既にやる気になっている旧友を見て、とりあえず邪魔にならないよう二人から距離を取った。

その間際に母親としてサイカに「がんばってね」と声援を投げかける。

（え、本当にいきなり稽古始めるの？）

戸惑いながらあたふたと剣を構え始めるサイカ。その型は潤也時代に見た剣道の構えで、木刀を両手で握り切っ先を正面に突き出す。ちなみにサイカに剣道の経験は全くない。ただ他に参考になる知識がなかったのである。

その構えにローレンは戦慄した。

眼を見開き、木刀を握る手に自然と力が籠もる。

サイカは剣は初心者だ。ローレンはアーシェからそう聞いている。同じ孤児院の出身であるアーシェの頼みに軽い気持ちで引き受けた。その行為は軽率だったと今では言わざるを得なかった。

サイカの構えはあまりに自然体である。サイカは割と考えなしに構えているが、体はその構えの真髓を自動的に実行し隙のない構えを取っていた。

結果、相対するだけでローレンは気圧される。どこに打ち込んでも返されるイメージしか持てないのだ。これほどの熟練者を前に自由に打ち込めなどと、少し前の思い上がった自分に強い憤りを感じるほどに。

（えっと、ローレンさん動かないけどもう打ち込んで良いんだよね？　というかローレンさんがとても真剣な表情でありがたいんだけどなんか怖い……！）

そしてサイカは剣を振るうべくローレンへと踏み込む。その踏み込みはあまりに異質だった。

予備動作がほとんどなく、初速から最速の踏み込み。円状の軌道を描く剣戟は無駄なくあらゆる動作の起こり始めが早い。結果、速度自体はさほど速くない筈にも関わらず魔力強化したローレンが、魔力強化すらしていない子供のサイカの踏み込みに明らかな遅れを取った。

躲すのは既に手遅れであり、木刀で防御するのも辛うじて間に合う程度の有様だ。だがそれでも防御は間に合った。その筈だった。しかしサイカの木刀は、防御した筈のローレンの木刀をすり抜ける。驚愕で思考が白に染まる。

けたたましい音と共に、魔力強化してさえ痛恨の打撃がローレンを襲った。

苦悶の呻き声を僅かに漏らし、二、三歩後ずさる。

ローレンは自身がどうしてやられたのかが理解できない。あまりの非常識さにしばらく自失してしまったほどだ。

ちなみにサイカも自分がどういう技を放ったのかが理解していない。ただ途中で変わった動きをした様な、という程度の認識だったりする。

「……見事だ。素晴らしい剣戟だった」

ローレンはサイカを心配させないよう痛みを瘦せ我慢し、笑みを浮かべながら称賛を口にする。

そんなローレンはサイカから見て、まるで獲物を見定めた獣の獰猛な笑みのようであった。まるでやり返さなければ気が済まないとも言ってるかのよう。サイカの全身が嫌な緊張に苛まれる。

盛大なすれ違いだがローレンの外見が鬼の形相と言うに相応しいから仕方がない。

余談だがユリスがローレンに苦手意識を持っているのも全てこの凶悪な外見こそが元凶である。

「ど、どうも。……それより大丈夫ですか？」

内心では大丈夫でない方が保身に繋がりそう、などと邪なことを考えつつも一応心配しておく。

あの獰猛な笑み（サイカ視点）を見ているので俄然 問題ないだろうとは思っているが。

「気にするな。頑丈さには自信がある。

それよりも、だ。ふざけるなよアーシエ。明らかにサイカの剣は熟練のそれだぞ」

「……私も実物見たの初めてだけど凄いわねー」

「お蔭で自身より剣に秀でた者に稽古を付けるなどとふざけた話になった。今度からは技量くらい正しく伝えてくれ」

「ごめん、気を付ける。……でも今日くらいは剣の稽古を付けて貰

いたいんだけど、ダメかしら」

「残念だがサイカに稽古を付けられるほど、俺に剣の腕はないな」

これはもしかして逃げられるもといこのまま帰る流れだろうか、と半信半疑ながらもサイカは期待した。

だがローレンは義理堅い男であった。剣の稽古をすると言った以上、最後までに付き合うつもりであった。だからこそ彼は格上の者に相対するかのような面持ちで、手加減を捨てた。

「だからせめてとことん相手をしよう。今度は攻撃を当てても気にせず追い打ちをかけてくれて良い——『ハルバド』」

ニヤ、と強気に笑いローレンは魔術を行使した。

薄黒い肌が一段と黒く染まる。白い魔力光が全身から疎らに、淡く光りを漏らす。

全身硬化の魔術。今のローレンは岩と同程度の硬さを誇るだろう。木刀ではダメージなど受けよう筈もない。

そしてサイカは悟った。あの人やり返す気 満々だと。大人げなく容赦なくタコ殴りにする気なのだと。そんな間違った推論を、あの意味あり気な笑みを見てサイカは確信を持って信じた。

「サイカ、今度はこちらから行くぞ！」

（これは本気で迎撃しないと——死ぬ！）

不幸なすれ違いであった。

もしローレンが義理堅い男であるとサイカが気付いていたなら、あんな結末にはならなかったかもしれない。

しかしもう遅い。サイカが勘違いしたままローレンは彼に向けて踏み込んでしまった。采は投げられてしまったのだ。

ローレンがサイカへ木刀を振るう。力強くもきちんとした型が見て取れる堅実な剣撃だった。しかし殺る気になったサイカの体にはあまりに温過ぎた。

まずサイカはローレンの剣撃を自身の木刀で受け流し、すれ違い様でローレンの小手を射抜いて木刀を叩き落とす。そのまま流れるような動作でサイカも木刀を捨てながらローレンの腕を掴み、体の重心を利用し流れるような自然さでローレンの巨体を真上へと投げ飛ばした。

中空に投げ出され、驚愕に蝕まれた身動きの取れないローレンにサイカは容赦なく狙いを定める。中腰になり右手を掌底の形にし、落下してくるローレンの胴体へ向けて掌底を放つ。震脚を十全に響かせ、異様なまでに腰に肩に腕にと捻りを加え、その掌底は螺旋を描き容赦なく敵手を穿った。

「ッグハ！」

鈍く響く重い轟音。

吐血しながら地面を転がって行くローレン。

外傷以上に内傷を与えるあの技の前には、岩並みの防御力も分が悪かったと見える。

そのまま血を口から振りまきながら転がり続け、ローレンがようやく止まった頃には、彼は白目を向いて意識不明に陥っていた。しかも口からの吐血はまだ止まっていない。

（あれ……これ、もしかして殺っちゃった？）

さつと血の気が引く。嫌な汗が湧き、焦るサイカ。

実際にローレンは内臓を圧潰されて割と危険な状態である。もし彼が魔人という種族でなく人族だったら即死だったかもしれない。

そんな状況の中でアーシェは慈愛に満ちた笑みを我が子に送り、ポンッと肩を叩いた。

「頑張つて手加減……身に付けましょうね！」

「それ所じゃないよね母さん!？」

サイカの言葉は正論だが、悲しいかな貴方が犯人である。それからアーシェは混乱していた。

4話 道化の遺産

あの後ローレンはアーシェの治癒魔術により一命を取り留めた。それでも全快には程遠く数日は安静にする必要があるだろう。

サイカはローレンにひたすら謝った。ローレン本人は簡単に許してくれたが申し訳なさで一杯だ。それほどあの怪我は危険だった。具体的には致命傷一歩手前である。まさに生きててありがとうな状態だ。

なおそんな怪我では稽古続行は無理である。

ローレン持ち前の義理堅さから続行しそうになったが、そこはサイカとアーシェが必死になって止める。むしろ無理やりにも医者の所に連れて行き、診察が終わると脇道もさせずお帰り願った。帰り際に言われた「手加減の訓練には付き合ってやる」の言葉には、あまりの申し訳なさで感謝の念で自然と頭が下がる想いだ。

そんなこんなで夕方である。

家に帰って自室へ戻り夢玉の入った紙袋を持ち、すぐに家を出た。

シアはこの夢玉をあげると言って寄越した。

しかしサイカのような小市民が持つには夢玉は値段の高すぎる代物だ。なにせ一般的な市民では一年くらい頑張つて働かないと買えないだけの価値がこの夢玉にはある。つまり平均的な結婚指輪 四つつ分である。

サイカはこれを受け取つてすぐに突き返す覚悟を決めた。だから紙袋からまだ一度も出していない。

プレゼントを返品などと野暮なことだ、がそんなこと言っている余裕はない。だって心臓に悪い。

返すなら一刻も早い方が精神衛生上 都合が良い。

アーシェの貴重な休日ということもあり、朝昼は剣の稽古を優先した。だがそれでも今日中にはなんとしても返品すべくサイカは孤児院へ向かった。

さてその孤児院は部屋が一人一人に割り当てられている。孤児院にしては珍しいことだ。その辺りは個人経営の利点、というよりジョシアの采配によるものだろうか。

それより問題なのは部屋毎に表札がないことだ。孤児院に着いたは良いものの、シアの部屋がどれかわからずサイカは途方に暮れた。

という訳で事前に教えて貰っていたとある人物の部屋に向かう。

その部屋は二階の奥にあり、木彫りで刻まれた部屋番号は220だ。ノックをしてしばし待つ。

ドアが開いていつもの快活そうな様子の少年、イグルが出て来た。

「おうサイカか！ こんな夕方にどうしたよ。もしかしてもう冒険者しなくなったか？」

「こんな夕方に悪いとは思うけど冒険者はまだいいや」

「そりゃ残念。とりあえず上がるか？ 茶菓子はねえけど抹茶ぐらい出すぜ」

「ありがたいけど大した要件じゃないからさ。でもなんで抹茶？」

「以前に冒険者仲間に茶菓子とセットで貰ったんだよ。けど抹茶は苦くてな……どう処分したものか悩んでたんだ」

「いや飲めよ」

元来 抹茶は茶菓子と一緒に味わうものである。単品で味わえばそれは苦いだろう。まだ少年と言って良いイグルの味覚にその味は理解し難かったのかもしれない。

日本の要素が濃い抹茶には心惹かれる部分はある。ただ抹茶はさほど好物と言う訳でもないため今回は見送ることにした。

「ところでシア……シアフィールの部屋どこにあるか知らない？」

「……シアフィールの？ 一応知っちゃいるけどよ。あんな暴力女の部屋なんぞ知ってどうすんだよ」

イグルの表情が僅かに不満そうに歪んだ。

サイカもあまり他人の關係に口を挟む気はない。

だがサイカの家まで引つ張って来たのはシアである。夢玉を半ば押しつけられたとはいえあの高級品をくれたということもある。その所為だろうか、シアに対して彼のようにには悪感情を抱けなかった。

だから暴力女と言うのは言い過ぎではないかと思ってしまう。身内としての軽口で暴力女と呼ぶならまだしも、サイカには残念ながらイグルの言動に温かみを感じ取ることは出来なかった。

確かにサイカとて彼女とは初対面で殴りかかれた身だ。イグルが暴力女と呼ぶのも多少は解る。思い返せば二度目の邂逅でもいきなり殴られそうになったことだってあった。三度目なんて目を瞑ってる時に不意打ちされたりしました。会う度に拳を振るわれているのだから、シアのことを暴力女と呼ぶのはサイカにも十二分に理解できる内容だった。

こうして鑑みると、弁護の余地はまるでなかった。

「預かり物があるんだ。それ返そうと思ったんだけど、シアの部屋がどこにあるのかわかんなくてさ」

「いつの間にあの女に会ったんだかな。けどタイミングがわりいよ。アイツ昨日から帰ってねーらしいぜ」

魔法具専門店に行った日だ。とするとサイカと別れて以降、一度も孤児院に帰っていないのだろうか。

「確か門限あったよね。もしかして他の家に自由に泊まったりできるくらいには、ここの規則って緩い？」

「そこまで緩くねえよ？ 規則破ったらジョシアさん怖えからな。せめて事前 連絡くらい入れねえと地獄だな。だから門限破ろうとする奴はほとんどいねえし、一日帰って来ない場合はまあ……面倒臭いことになってることも多いかもな」

「面倒臭いこと？」

「興味本位で森まで行って魔物に襲われてたり、山まで行って遭難したりは割とあったぞ。ここらは比較的治安良いけど、人売りに攫われるなんてことも在り得なくはないしな。まああれの場合は攫おうとするともれなく返り討ちで人死に出るだろうけど。例え森まで行って運悪く魔物の群れに出会っても一方的に蹂躪する方だし。てな訳で多分森かどっかで道に迷ってんじゃねえの？」

「……ある意味では信頼が凄く厚いんだね」

心配はしてしまうが、サイカもシアの武闘を見ているためイグル

の言動には納得できた。

人死にや迷子云々は置いておくが、シアに襲い掛かった所で返り討ちにされる様を想像するのは容易だ。あの人族としてはあまりに力強過ぎる拳や蹴りが直撃すれば、例えばオークくらいなら一撃で行動不能である。

とは言えそこまで単純とは思わないが。不意打ちで昏倒させられる可能性もあれば、薬物という手もあるだろう。ただあまり不吉なことを言うのは気分的に憚られた。

けれどイグルもさほど心配そうではないのは少し安心できる。

いくらそれほど仲が良くなくとも、さすがに同じ孤児院内の人間の不幸を喜ぶことはないだろうとの判断だ。

「さすがは能力持ちってことだよ。冒険者で換算すると下手すりゃB級並みなんじゃねえのかアレ？」

とても気になる単語が出て来た。

冒険者のランクも気になるが、それ以上に能力持ちという言葉が気になる。

「ちなみに能力持ちの意味を忘れちゃったみたいなんだよね。だから説明があると嬉しいな」

「サイカの記憶喪失って変な所で出てくんのな……」。

能力持ちってのは固有能力を持つてる奴を指す言葉だよ。固有能力ってのは簡単に言えば、そいつ特有の特殊な力だ。暴力女の場合は無限再生、傷が出来たらすぐ治る。あとその副作用か力も魔力も化物染みてんな。

能力持ちなんて滅多に居ないからな、俺もこれくらいしか知らねえんだ。これ以上はサイカの母親か妹にでも聞いてみるよ。魔術師

だから俺より詳しいと思うぜ」

あの怪力がただの副産物。なるほどさすが異世界と言う他ない。魔術以外にこれほど無茶な力が存在する事実にサイカは若干引き気味だ。

「いや充分わかったよ。説明ありがとね。でも凄そうだな固有能力？俺も何か欲しかったな」

言い終えて、そういえば全自動武術はもしかして固有能力だろうか、などと少し考えた。ただアーシェが気付きそうなもので違うとは思うが。

「こればかりは生まれ持った才能だからな」

「才能ねえ……」

異世界に来たにも関わらず魔術も使えず能力もない。せつかくフアンタジーが存在する世界だと言うのに、どうにもそう言った才覚とは縁が薄いようだ。

ただ能力が使えないのが普通と言う事実は助かった。魔術のように生活と密接に関わっていたらどうしようかと思っていた所だ。

「それはそうと預かり物はジョシアさんに頼んだらどうよ。アイツが帰ってきたら渡してくれると思うぜ？」

そう言ってくれるのは嬉しい。だが夢玉はサイカにとって超高級品である。誰かを經由することには抵抗がある。

「ありがと、でもシアが帰ってきたら自分の手で渡すよ。という訳

でその時のためにシアの部屋を教えて貰えるかな」

『それは雨降る夜のこと、二台の車は仲良く赤く燃えていた。普段は静かな十字路も今では明るく騒がしい。路地の中心で燃える車と、困んで騒ぐ野次馬達。気持ち悪い、気分が悪い。』

これはいつかの再現で、酷く恐ろしい夢だった』

翌日になった。あの後でシアの部屋も教えて貰い準備は万端だ。いつも通りにユリスと共に孤児院へ向かう。なおアーシエは今日から再び仕事の修羅場だ。

なおサイカの手に夢玉入りの紙袋はない。まだシアが孤児院に帰っていない可能性がある以上、あまり高級品を持ち歩きたくなかったのだ。

まずはシアが帰ってきたことを確認してから、それから取りに行けば良いと言う判断だった。

もう帰っているだろうか、サイカは不安に思う。

一度は樂觀したもの、時間が経つと不意に不安が過る。本当に危ない目に合っていないかと。ちゃんと帰って来るのかと。

らしくないと、サイカは思った。

シアとはまだそれほど付き合いがない。そんな他人のためにここまで不安を抱くなど、サイカ本人からして意外であった。

昔からの悪い習慣で、サイカは他人のことで心動かされることは少ない。

潤也だった頃の学生時代、仲の良い友人が転校することになって、もあつさりと見送った。些細な言い合いから疎遠になった級友も居たが、その事についての後悔も些細なことではなかった。イジメられていたクラスメイトには平然と見過ごし続けて来た。

そんなサイカである。

理由が違い過ぎるが、それでも付き合いの浅いシアに対してここまでの不安を抱くのは自分でも違和感がある。

何が違うのかの心当たりは、今回ばかりは命の危険があるかもしれないということだろうか。

そもそも他人に頓着がさほど湧かないと言う悪癖は、両親が死んでから出来上がった物だ。

幼い頃はそうでもなかった。人の言葉や行動にちゃんと一喜一憂していた。こんな関心の薄い人間じゃなかった。人並みに好奇心旺盛で、人並みに傷ついたり喜ぶ子供だった。

それが潤也の両親が死んで、狂ってしまったのだ。

交通事故で両親を亡くしてから、親戚を名乗る知らない人が沢山来た。

遺産だの誰が潤也を引き取るかだの、子供であった潤也の不安を煽るような言葉が並べ立てられていた。皆が怖い表情をしていたのを、子供心によく覚えている。そんな大人たちを見ていて不安に駆られても、潤也の味方として守ってくれる存在である両親はもう手の届かない所に逝ってしまっていた。

だから潤也は目と耳を塞ぎ縮こまって、周囲が落ち着くのを待った。

それからだろうか。何が悪かったのかはつきりとはわからないが、その子供は人を今一つ信じ切れなくなった。人との距離を今一步の所で、詰められなくなってしまった。他人の喜びや嘆きに心があまり動かなくなった。

そんな子供の悪癖は、歳を重ねても悪い習慣としてこびり付く。特段困った事態も起きず直す機会も逸しただけに、もう一生この習性とは付き合う物だと思っていた。

その妄念が、シアに命の危険があるかもしれないという事柄であつさりと崩れかけていた。どうも他人の不幸に疎いと言うのも、生死に関わることは例外らしい。

「ねえお兄ちゃん、朝から調子悪そうだけど大丈夫？」

孤児院へ行く道程の中でも特に人気のない通路で、隣を歩いていたらユリスが心配そうに見つめてくる。

表面上まで暗くなっていたとは気付かず、慌てて取り繕った。

「ごめんごめん、大丈夫だよ。ちょっと怖い夢を見たのを思い出してただけだからさ」

「それなら良いけど、怖い夢ってどんなの？」

「乗り物が事故おこして燃えちゃう夢だよ」

「え、乗り物って馬車とかだよ。どうして燃えちゃったの!？」

「どうしてと言われても……夢の話だからね。不条理なくらい突然に燃えちゃったんだよ」

実際の乗り物は普通車と中型トラックだったのだが、この世界では乗り物と言えば馬車である。残念ながら車を扱うほどの世界の化学は進んでいなかった。

もちろん馬車同士でぶつかっても普通は燃えないので馬車で話の再現は難しい。

「突然 馬車が燃えるなんて……馬はどうなったの？」

「……馬は大丈夫。走って逃げて行ったから燃えてないよ」

日本の道路を疾走する馬車など冗談ではない。
馬なんて最初から居ないのである。

「そっかあ、馬が無事で良かったよー」

「そうだなー、良かったなー」

サイカは愛想笑いの棒読みだった。

どうしても架空の馬に感情を込めることが出来なかったのだ。
至極どうでも良い話である。

「……それで乗ってた人は？」

「どうなんだろうね。そこで夢が終わったからわからず仕舞いなんだ」

「そっか、でも夢の中の話なんだよね。現実で突然に馬車が燃える

訳ないから気にしない方が良いよ絶対！」

「確かに気にしても仕方ないか」

潤也は両親が事故に合った場面を初めて見た。

何せあの交通事故が起きた時、潤也は親戚の家で両親を待っていたのだから。

だからあの夢は虚構である。そうだと解っていても脳裏に刻みこまれてしまった以上は、もう忘れることなんて出来ない。

だが気にしない事にした。心配されてまで気にするのは、何か違う気がするのだ。

だから出来る限りの自然体でいるよう心がけようと決めた所で、奥の路地から二人の男女が出てくることに気付いた。人気のないこの通路では割と珍しいことだ。

男の方の赤黒い髪や精鍛な顔付きには見覚えがあった。確か魔法具店に行った帰りに出会ったアドリスと言う男性だ。

もう片方はそれこそ見覚えがある。どうしてこんな所にいるのかと驚くが、確かにシアフィールだ。

無事で良かった、そう思う。どこか不安に思っていた気分が晴れていくようだ。

そんな安堵の想いとは裏腹——身の危険を察知したサイカの体は、反射的にその場を跳び退いていた。

「『吾が声を受け入れろ』」

アドリスの声を始まりに、煉瓦造りの道路から淡い光を帯びた魔法陣が浮かび上がる。膨大な魔力が込められた陣の発動。その予兆を無意識に感じ取ったサイカは自動的にその範囲外へ逃れていた。

だがユリスは未だ魔法陣の内だった。

魔法陣に刻まれた術式に魔力が通ることによって魔法が出力される。甲高く乾いた音が鳴り響き、魔法陣が眩く発光した。その時確かに魔術は発現していた。

魔法陣から光が消え、煉瓦の色彩とほぼ同化する。魔法陣があると知っていなければ気付かないほどの線の薄さだ。そこでようやくサイカは我に返る。

「……ユリス？」

見た目は変わっていない。だが声を掛けてもただ呆然と立ち尽くすのみで反応がなかった。ただその瞳は焦点が合っていないように見える。

サイカの困惑は大きい。

アドリスと言う一応は知った顔にいきなり魔術を使われた。そのアドリスの隣にシアがいることなんて特に訳がわからない。

そして今のユリスが心配なのにも関わらず、体が近寄ることに警鐘を鳴らすのだ。

「予期せず別の獲物を捕まえてしまったか。やれやれ、さすがに本命ともなれば素直に罠には嵌ってくれんということかな」

魔法陣を起動させたその声で、アドリスは誰にともなく語りかける。

サイカの体は既にアドリスへと警戒を露わにしていた。

「ユリスに、何をしたんだよ」

「……………ほう、君に家族意識と言うものはないと思っていたのがな。しかし道理で一度は出会っていないながら見逃す訳だ。道化と言えど、生体からでは純粋な人形は生み出せなかったと言うことか」

ビクリ、と体を震わせる。

アドリスの言葉は今一つ理解できない事ばかりだ。だがそれでも確実に、朝霧 潤也の意識が此処にある理由の一片をアドリスは語ったのだとそう悟る。

知れるなら知りたかった真実の手掛かりを前に、サイカはその欲求を無理やりに押さえつけ再度問いかける。

「質問に答えてくれよ……あんたはユリスに何したんだ」

そこでアドリスはようやくサイカへと真っ直ぐ視線を向けた。

「そう大したことではないがな。私の言うことをよく聞くよう洗脳の魔術を掛けたただけだ。それも効果は精々三十分程度な上に、高度な命令は聞かせられんと言う扱い辛い代物だ」

体が警戒する理由がサイカにもわかった。

命令してユリスに攻撃させる程度のことは出来るのだろう。迂闊に近づいていれば実際にそうなっていたかもしれない。

そして洗脳と聞き、サイカはシアの様子を伺う。アドリスに洗脳されている可能性を疑ったためだ。

だが呆然としているユリスとは違い、シアとはあっさりと眼が合った。

「まあ悪いとは思うけど、これも仕事だしね。それにしても記憶喪失とか人格変わってるとかヒントはあったけど、まさかアンタが道

化の遺産だとは思わなかったよ」

シアからは確かな意思を感じる。少なくとも洗脳をされているようには見えない。それだけに今居るサイカが本来のサイカでないことを指摘され、罪悪感が胸を燦る。

「……俺達をどうするつもりだよ」

「端的に言えば誘拐だな。道化の遺産には価値があるからね。だからその君さえ大人しくしてくれるなら、そちらの少女の安全は保障しよう。逆にこの場から逃げるなら彼女を殺すし、抵抗するなら彼女が君の相手だ」

誘拐されたその先に、禄でもない未来が見え隠れしていた。

我が身が一番大事な以上、答えは決まり切っている。

「……………」

それでも声が出ないのは、喉がカラカラに渴くのは一体何故か。

このサイカは本来ではなく所詮は偽物。ユリスも偽りの家族で妹だ。この欺瞞に多少の負い目はあれど、命を差し出してまで助けたとは思わない。

にも関わらず、逃げようとも抵抗しようとも体が動かない。感情すら伴わない。

「ふむ、どうやら選べないようだな。それも良かろう、せめてもの慈悲だ。選択の余地なく君を屈服させてあげよう。シアフィール、君も動け」

「はいはい、わかりましたよ」

面倒臭そうにシアは全身に魔力強化を施していく。
目に見える程の膨大な魔力がシアから漏れ出していた。

「そして命令だ『あの男を無力化しろ』」

「……はい」

ユリスの虚ろな目がサイカを捕え、幽鬼の様に動き出す。

「セツト……」

ユリスの背後より虚空から電気の球体が発生した。一つ二つと瞬く間に増殖し、すぐに十を超えて二十に到達し、なお増殖を繰り返す。

ただし雷球の電力はそう大したものではなかった。無力化するとして選択したのが適切な電圧による死なない程度の電撃だったためだ。

「……行け」

静かな号令と共に、雷球がサイカを貫かんと一斉に掃射される。弾丸が数十、視認を許さない雷速で空気を駆け抜けた。

しかしその号令に先んじ、サイカは横へ無駄なく一歩踏み出し体を捻る。それだけで気付いた時には、直線を突き進んだ数十の雷球が全て外れていた。

まるで安全地帯を予知したかのような動き。その動きにシアは驚愕しながらも気を引き締め、アドリスもまた驚愕しながら歓喜する。さすがは道化の遺産だと。

その危機回避能力はサイカ本人の予想も上回っていた。いくらこの体が凄いと言えど、まさかあれだけの数の雷球を躲し切ることが可能とは思っていなかったのだ。

しかし驚きはない。平常時ならともかく、ユリスが操られ攻撃してきたのだ。今のサイカに驚くだけの余力はない。

それでも体が勝手に動くと言うのなら好都合だと思った。

外敵から身を守ってくれるなら、身内や友人を迎撃しようと構わない。体の防衛本能に任せておけば、感情に振り回されて体を鈍らせることもないだろう。

故にサイカは自動で動くままに身を委ねる。

深く呼吸を取り込む。

神経を研ぎ澄ませていく。

全身の無駄な力を排除し、理想的な自然体を作り上げる。

「……二射目、行け」

十数個まで生成した雷球を、ユリスは更に掃射した。

その視線、表情、空気の流れから魔力の流れなど、人間が意識的には感知できないような事象までもを感知し未来を予測し、サイカはその身をいち早く安全地帯へ置いた。予定調和の如く外れていく雷の弾丸。いくら速くとも直線にしか進まず、しかも術者が洗脳されているためサイカの体にとっては聊か単調に過ぎた。

すかさずシアは地を蹴り、ネコ科の獣染みた動きで距離を瞬く間に詰める。その勢いを乗せた拳はうねりを上げながらサイカへ向かう。半身を捻りながら腕で十全に受け流す。にも拘わらずサイカの腕には強烈な衝撃が走った。

シアはすぐに振り向き様の上段蹴りを放った。中腰になるだけで

紙一重に躲す。

シアの上空を指した足先が一転、力強く踵落としを打ち下す。サイカが半歩後ろに下がることで、踵が鼻先を素通りして行つた。次いで煉瓦が割れる轟音。踵の着弾点を中心に、蜘蛛の巣状にヒビが入っていた。

逸脱した力から放たれるシアの攻撃は一つ一つが殺人技だ。

あんな攻撃が直撃すれば死ぬ。掠っただけで致命傷になりかねない。誘拐どころか殺す気ではないかと疑い、その恐怖に悪寒が背に走る。

それでも体は自動的だ。踵落としを空ぶつたシアの際に反撃しようとうと掌底を形作る。撃ち出す寸前、危険を察知しその場から跳び引いた。

幾つもの雷球がサイカが居た場所を通過する。

ユリスの魔術に冷や汗を流す間もなくシアが追従し、硬く握った拳を打ち出してくる。その図抜けた力から放たれる拳は、ただそれだけで並み大抵の生物を死に至らしめるだけの威力が込められている。無駄のない動きで回避行動を取りながらその攻撃を受け流す。

更にシアの猛攻は止むことはない。力強く流れていく拳や蹴りを、紙一重で躲し或いは受け流す。

如何にサイカの体の技量が非凡でも、シアの猛攻を前にしてはそう容易く反撃には出られなかった。

そもそも二人は土台が違い過ぎる。

並外れた魔力による強化と元来高すぎる素の身体能力が合わさり、シアの力や速さは飛び抜けている。攻撃の度に腕先や足先が霞み、目で捉えきれない程の速さ。攻撃の度に引き裂かれた空気が肌に叩きつけられる程の力強さ。それだけの身体能力を扱えるだけの技量も有しているのだから始末に負えない。

それに引き替えサイカは所詮13歳の体である。普通より身体能力は高いがあくまで普通と比べての話だ。魔力強化による底上げもまとも出来ない。

純粹に力だけで比べるなら、それこそ子犬と巨像くらいの差は存在していた。

これだけ力に差がありながら、戦いになっていること自体が一種の奇跡だ。それほどまでにサイカの戦闘技術そのものは逸脱している。稀とは言えシアの僅かな隙を付き、反撃をしようとするほどには。

だがその反撃もユリスの雷球による妨害で無為に終わる。シアに雷球が当たらないよう配慮されていることと言い、アドリスの洗脳は優秀だ。

シアの攻撃を最適化した動きで捌き続けながら、サイカは焦燥に駆られていた。最少動作で立ち回っているとはいえ、呼吸が乱れ体が重くなり、体力の限界が見え始めたからだ。殺傷力の強い攻撃にさらされ、神経が磨り減っていくことも体力消耗の大きな原因だろう。

シアは未だ息一つ乱していない。ユリスも魔力が無くなるのはまだ先の事だった。アドリスなど戦線に参加していない以上、余裕が有り余っているだろう。

このまま続けばギリ貧であることは目に見えている。

要はユリスの妨害があるからいけないのだ。原因が解ればそれを封じるよう動かない手はない。

シアの蹴りを躲す際、ユリスとサイカの間にシアを置くよう移動する。ユリスから見て死角に位置する場所に陣取り、譲らないまま再びシアの攻撃を捌き続けた。

とはいえ横合いからでも雷球を放てるだろうし、気休め程度の効

果しか望めないだろう。だがその気休めの分、シアの隙に付け入ることが出来る。

その考えを読み取れたシアの拳が、焦りで大振りになった。望外の隙にサイカは大振りの拳を掻い潜り、自身の最速でシアの顎先を拳で打ち抜く。

脳を揺らされ脳震盪をお越し足踏みするシアの横を、サイカはそのまま通り過ぎた。シアが行動不能になる数秒の隙に一直線でユリスの元へ駆け抜ける。

幾つもの雷球の連弾を最少動作で躲し、遂にユリスの懐へと到達した。

サイカは腰から肩、腕先までを極限まで捻りながら掌底を形作る。その動作で思い浮かぶは、螺旋を穿ち対象の内臓を圧潰するあの絶技。

中腰に構え、ユリスに向けて震脚と共に掌底を打ち出――

――家族を殺すのか？

脳裏に過ぎった思考に体が停止する。

流され続けていた頭で、僅かにでも魔人さえ殺しかけたこの技を打つことの意味を考えてしまった。それも相手は偽りとは言え妹で、殺人への忌避感だって人並みにある。

そんな僅かな隙は、あまりに致命的だった。

「行け……」

未だ控えていたユリスの雷球3つが弾丸となり、サイカに的中し

た。

全身に強烈な痛みが駆け巡る。
辛うじて意識こそ失わなかったが、体は痺れ頭が真っ白になる。

「結構頑張ってたけど、結局ここまでだね」

サイカがよろめき後ずさった所に、後ろから来ていたシアがサイカの腕を取る。

薄く刻まれたままの魔法陣まで引っぱり、その陣内にサイカを無造作に投げ入れた。その衝撃と痛み小さく呻き声を上げる。

「予想以上に手間が掛かったな。さすがは道化の遺産だ」

サイカに近寄ったアドリスは、サイカを見下しながら称賛の言葉を述べる。

朦朧とする意識の中、サイカはこの場で唯一 気兼ねなく明確な敵と言えるアドリスを睨んだ。最適な動きを導き出す体の補正も借り、気力で立ち上がる。

とにかくこんな状況を引き起こしたアドリスを殴らなくては気が済まない。力なく拳を握り、思うように動かない体を必死で動かして振りかぶった。

「『吾が声を受け入れろ』」

サイカが殴るより遥かに速く、アドリスの詠唱で魔法陣が起動する。

陣が発光し、洗脳の魔術は完成する。

サイカの目から光が消え焦点がズレた。

握られた拳は解かれ、振り上げた腕はだらりと下がる。

サイカの中にあつた潤也の自我は洗脳の魔術により束縛された。
意識の底へと自我が沈んで行く。

『——意識が覚醒状態であることを確認。人形の自我を起動します』

ところでこれは仮定の話だが、もし潤也の自我という異物がなければサイカにはどのような自我が存在していたのであろうか。
元よりサイカは道化に造られた存在だ。だからその自我は、道化以外の言葉など聞く耳持たぬ、忠実な人形であつたのだらう。

そしてその人形は、この後に訪れる道化の道楽に付き合うために
戦闘思考で調整されていた。

『——人形の自我の起動を確認。これより被験体の実戦測定のための最終実験を行います。魔物召喚術式、起動』

遠く山の麓、石造り小屋で強大な魔力が迸る。

森の中から白い光の柱が天を貫いた。それは街から見てすら解る
程の魔力の噴出。

突然に現れた光の柱に、シアとアドリスは目を見開き釘付けとな
った。

「馬鹿なッ。あの不発弾が起動したとでも——」

光の柱に釘付けとなつたアドリスの隙に、人形の自我を伴うサイ

力は反応した。脱力状態から放たれる無拍子の抜き手。それは寸分たがわずアドリスの喉を射抜き突き刺さった。

「ガ、フ……………きさ、ま……………」

抜き手を引き抜く。血が喉から零れ出た。

憎悪で顔が歪むアドリスに、サイカはただ淡々と感情のない視線を送る。

アドリスの体が傾き、地に倒れ伏した。喉からは変わらず血が流れ出て煉瓦の地面を濡らしている。

アドリスという術者が死んだことで、洗脳の魔術は解かれた。

まずユリスが洗脳から解放され、しかし洗脳のショックで気絶し地面に倒れた。サイカも洗脳の束縛が解かれたことで潤也の自我が浮上し、そして同じく意識を失った。

一人残されたシアは既に光の柱など見ていなかった。

突然の惨劇に反応できず、地に転がる三人を見つめしばらく呆然としていた。

「……………嘘でしょ」

4話 道化の遺産（後書き）

アドリスさんがログアウトしました。

彼は一章の中ボスだった訳ですが、何の見せ場もなかったですね。

だが例えアドリスがいなくなっても第二第三のアドリスが（以下略）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8285w/>

道化の造った英雄譚

2011年11月20日14時03分発行